

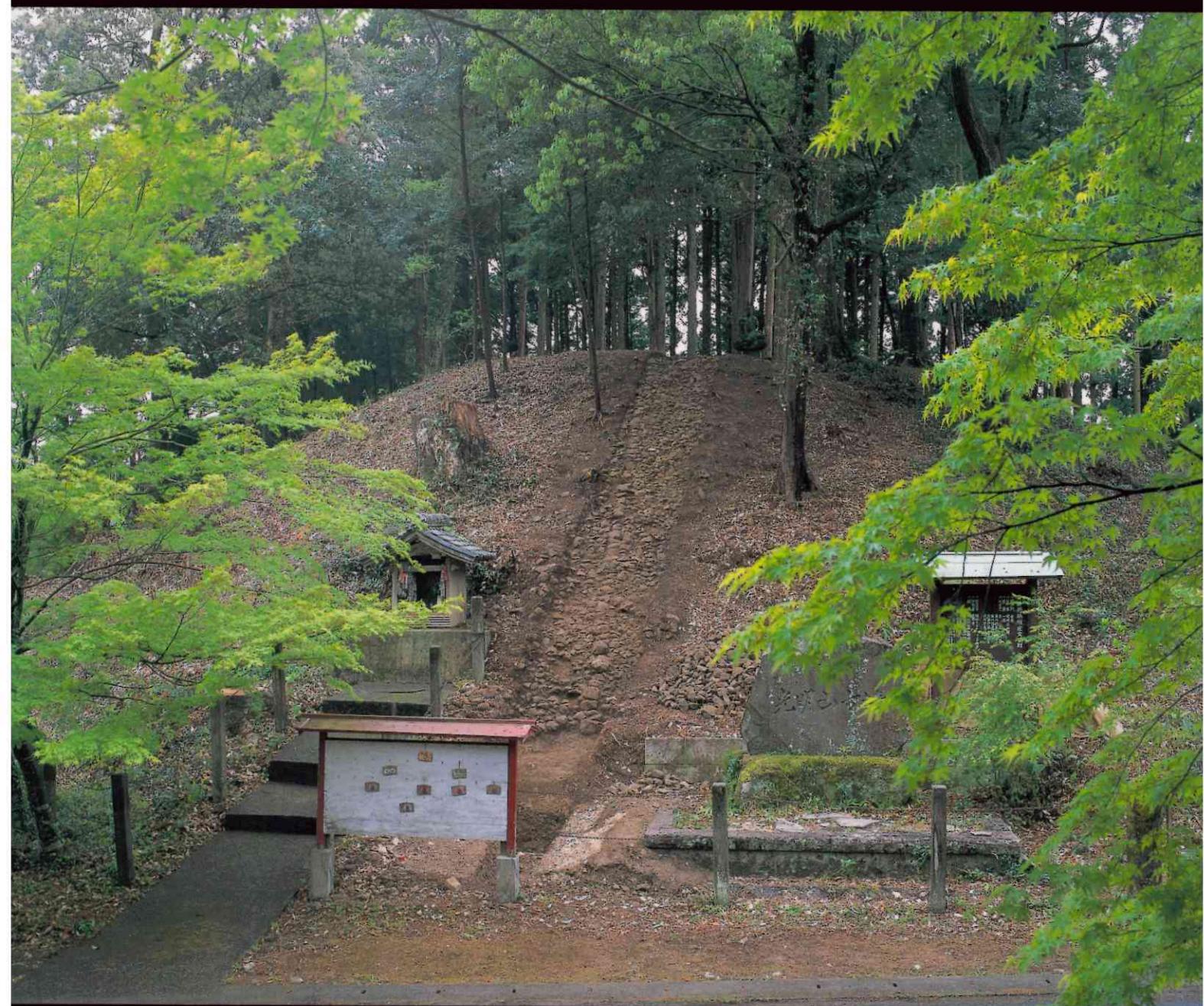
光明山古墳

Kohmyohsan Tumulus

浜松市教育委員会

2019年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March 2019



光明山古墳

Kohmyohsan Tumulus Excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education



2019

例　　言

- 1 本書は、静岡県浜松市天竜区山東 2878 外において実施した光明山古墳の測量調査および発掘調査にかかる報告書である。
- 2 当地の行政区分は 1889 年から 1956 年までは光明村、1956 年から 1958 年までは二俣町、1958 年から 2005 年までは天竜市、2005 年以降が浜松市である。
- 3 光明山古墳にかかる発掘調査は、2018 年（平成 30 年）3 月から 11 月にかけて 3 回実施した（7、8、10 次調査）。また、過去には静岡県教育委員会、天竜市による発掘調査（2、3 次調査）や、静岡大学や関西大学による測量調査（1、4 次調査）などが行われている。これらの調査成果についても本報告書に併せて掲載する。
- 4 1971 年（昭和 46 年）に静岡県教育委員会によって実施された 2 次調査の成果については、内部資料を参照した。また、同年に天竜市教育委員会によって実施された 3 次調査については、既存の報告資料を用いたほか、調査担当者である久永春男氏が作成した調査記録を森田勝三氏から提供いただきその成果を反映させた。
- 5 2018 年の発掘調査は、土地所有者の曹洞宗光明山光明寺の同意を得て、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が実施した。調査面積は約 360 m² である。
- 6 2018 年に実施した現地発掘調査および整理作業は、鈴木一有、山中美歩、鈴木敏則、和田達也（浜松市文化財課）が担当し、小杉直孝、北澤志織、坪井里恵、山崎明日香、渡邊三恵、安川あや（浜松市文化財課）が補助した。調査にあたり、山下信一郎氏、川畑純氏（文化庁文化財第二課）、大谷宏治氏、菊池吉修氏（静岡県教育委員会）の助言を得た。
- 7 本書に関わる執筆は、第 1 章 1、3、4、第 2 章 1、2 を山中美歩、第 2 章 3 を鈴木敏則が行った。上記以外については鈴木一有が執筆し、全体の内容を調整した。本書の編集は山中美歩、和田達也の補助のもと、鈴木一有が行った。
- 8 2018 年の調査にかかる写真撮影は鈴木一有が行った。また、2 次調査の現地写真は内部資料から抜粋した。
- 9 2018 年の調査にかかる記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡　　例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。ただし、1971 年に実施された調査成果については、調査当時に用いられた方位と標高値を表示している。
- 2 遺物の番号は埴輪の器種ごとに分けて、連番を付した。
- 3 本書で報告する土層及び遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）を参照した。
- 4 本書の作成にあたり、以下の方々および機関のご協力、ご教示を得た。その名を記して謝意を表したい（敬称略）。

上田直弥、大須賀広夢、岡田大雄、川江秀孝、甘蔗孝仁、木村聰、近藤史昭、鈴木康大、

田村隆太郎、林順、平野吾郎、菱田哲郎、向坂鋼二、山田暁、渡邊貴亮

光明山古墳

目 次

例言・凡例

第1章 序 論 1

- 1 調査に至る経緯 1
- 2 調査研究のあゆみ 2
- 3 光明山古墳をめぐる地理的・歴史的環境 3
- 4 調査の経過 5
- 5 測量調査 8

第2章 発掘調査の成果 13

- 1 調査区の設定 13
- 2 光明山古墳 13
- 3 光明山2号墳 22
- 4 出土遺物 27

第3章 後 論 33

- 1 光明山古墳の構造と築造時期 33
- 2 光明山古墳築造の歴史的意義 38
- 3 今後の展望 40

図 版

図 版 目 次

1 1 レンチ全景	2 3 レンチ遺物出土状況
2 1 後円部全景	3 3 レンチ遺物出土状況詳細
2 1 レンチ遠景	10 4 レンチ全景
3 1 レンチ葺石検出状況	11 1 4 レンチ葺石検出状況
3 1 レンチ墳頂部検出状況	2 4 レンチ上段墳丘サブレンチ
2 1 レンチ墳頂部葺石検出状況	3 4 レンチ下段墳丘サブレンチ
3 1 レンチ墳頂部遺物出土状況	12 5 レンチ全景
4 1 1 レンチ葺石（墳頂付近）	13 1 光明山2号墳2次調査箇所全景
2 1 レンチ葺石（中段平坦面付近）	2 光明山2号墳2次調査完掘状況
3 1 レンチ中段平坦面検出状況	14 1 光明山2号墳7レンチ
4 1 レンチ中段平坦面サブレンチ	2 光明山2号墳6レンチ
5 2 レンチ全景	3 光明山2号墳8レンチ
6 1 2 レンチ遺物出土状況	15 1 光明山2号墳7レンチ
2 2 レンチ遺物出土状況詳細	2 光明山2号墳10レンチ
3 2 レンチ西側サブレンチ	3 光明山2号墳9レンチ
7 3 レンチ全景	4 光明山2号墳11レンチ
8 1 3 レンチ墳丘上段検出状況	16 1 円筒埴輪
2 3 レンチ墳丘上段サブレンチ	2 朝顔形埴輪
3 3 レンチ中段平坦面サブレンチ	3 出土埴輪の詳細
9 1 3 レンチ中段平坦面検出状況	

挿 図 目 次

Fig.1 光明山古墳の位置	1	Fig.19 4 レンチ葺石詳細	19
Fig.2 光明山古墳群周辺の遺跡分布	4	Fig.20 5 レンチ実測図	20
Fig.3 調査風景	6	Fig.21 2次調査検出遺構配置図	22
Fig.4 現地説明会	6	Fig.22 光明山2号墳検出遺構	23
Fig.5 測量風景	7	Fig.23 光明山2号墳土層断面図	24
Fig.6 整理作業風景	7	Fig.24 8次調査トレンチ実測図	25
Fig.7 墳丘航空写真	8	Fig.25 8次調査検出遺構配置図	26
Fig.8 光明山古墳測量図集成	9	Fig.26 光明山古墳出土円筒埴輪（1）	27
Fig.9 光明山古墳群測量図	10	Fig.27 光明山古墳出土円筒埴輪（2）	29
Fig.10 光明山古墳測量図	11	Fig.28 円筒埴輪の詳細	30
Fig.11 光明山2号墳測量図	12	Fig.29 光明山古墳出土朝顔形埴輪（1）	31
Fig.12 レンチ配置図	13	Fig.30 光明山古墳出土朝顔形埴輪（2）	32
Fig.13 1 レンチ実測図	14	Fig.31 光明山古墳遺構配置図	33
Fig.14 1 レンチ葺石詳細	15	Fig.32 光明山古墳の設計原理	34
Fig.15 2 レンチ実測図	16	Fig.33 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷	36
Fig.16 3 レンチ実測図	17	Fig.34 光明山古墳群復元図	37
Fig.17 3 レンチ葺石等詳細	18	Fig.35 遠江における古墳の変遷	38
Fig.18 4 レンチ実測図	19	Fig.36 光明山古墳の立地環境	39

表 目 次

Tab.1 光明山古墳群の調査履歴	5
-------------------	---

第1章 序論

1 調査に至る経緯

光明山古墳は、浜松市天竜区山東に所在する市内最大の前方後円墳である。墳丘の遺存状態は良好であり、墳丘斜面には葺石石材が露出し、埴輪が散布する。典型的な中期古墳の様相がうかがえることから、1955年、静岡県史跡に指定された。光明山古墳の南側には造り出し付き円墳の光明山2号墳があり、この2基を総称して光明山古墳群と呼んでいる。2号墳については、1971年に施設建設に伴い墳丘の発掘調査が行われており、現在は墳丘上部が削平されている。いっぽう、光明山古墳については過去に測量調査が実施されていたが、発掘調査は行われておらず、詳細な墳丘構造は不明であった。

光明山古墳がある天竜区山東は南に接する天竜区二俣町とともに、天竜川と秋葉街道という南北交流の動脈をかけ、古くから政治と経済の中心地として栄えてきた。2009年以降、浜松市文化財課では、この地にある二俣城跡、鳥羽山城跡において継続的に文化財調査を実施し、多くの成果をあげてきた。両城は、戦国時代の城郭遺構と安土桃山時代の石垣等が良好に残存していることが評価され、2018年に「二俣城跡及び鳥羽山城跡」として国史跡に指定された。このほか、山東を含めた二俣地域では近世や近代の建造物をはじめとした歴史文化遺産が数多く残っている。近年、二俣地域を中心に、多様な遺産を活かしたまちづくりを進める気運が高まりつつあり、光明山古墳についても新たな価値づけと積極的な活用が期待されるようになっていた。

2016年10月、光明山古墳の土地所有者である光明寺から、危険木の撤去及び見学者の利便性を高めるため、樹木を伐採したいとの相談を受けた。浜松市文化財課は3ヶ年計画の環境整備事業を提案し、さらに伐採部分について、古墳に関する情報を得るために発掘調査を実施する案を提示した。この計画のもと、2018年3月から5月にかけて、光明山古墳における発掘調査を行い、11月に追加調査を実施した。また、2号墳の範囲内において開発事業が計画されたため、同年8月に確認調査を実施した。本書では、これらの発掘調査の成果を紹介するとともに、過去の調査を再検討し、光明山古墳の特徴を明確にしたうえで、この古墳が築造された歴史的意義について考える。

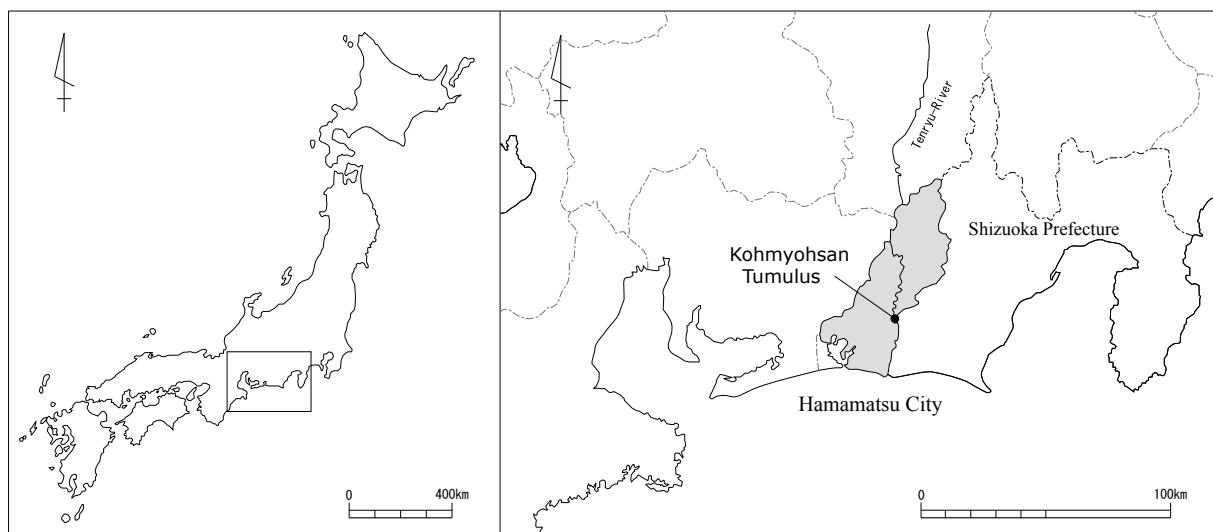


Fig.1 光明山古墳の位置

2 調査研究のあゆみ

光明山古墳が広く学界に認識されるようになるのは、1939年のことである（河村・大場 1939）。『静岡市郷土研究』第13輯に掲載された報文には、「（前略）光明山光明寺境内で古墳らしい小丘が発見された。筆者らは同小丘の表面採集で埴輪円筒の破片を得て、いよいよ古墳の確証を得たとされ、長軸34間（約61.8m）の前方後円墳であると報告されている。

1955年、光明山古墳は静岡県史跡に指定されている。指定に先立ち、1954年に光明村長から静岡県教育長あてに提出された史跡指定申請書は、古墳の規模を「長82m、巾48m、高8m」とし、「（前略）本年五月静大文理学部内藤晃教授の調査によれば完全に近く原形の保存」がなされているとの説明が付されている。1959年に刊行された『光明村誌』（光明村 1959）には光明山古墳の測量図が掲載され、申請書と同じ古墳規模の数値と、5世紀中頃という築造時期が示された。『光明村誌』掲載の測量図は、1954年5月に静岡大学によって作成されたものとみてよいだろう（1次調査）。

1971年には施設建設に伴い光明山2号墳の予備調査と光明山古墳の測量調査（2次調査）が行われ、直後に光明山2号墳の本発掘調査（3次調査）が進められた。光明山2号墳の調査内容は二俣高校社会部が作成した簡易印刷物（二俣高校社会部 1971）にまとめられたが、その内容は広くいきわたらず、1981年に刊行された『天竜市史』（向坂 1981）および、1990年に刊行された『静岡県史』（川江 1990）においてその概要が示されるに至った。これらの報告によると、光明山2号墳は、直径31～33m、高さ2.8m、の造り出し付き円墳とされる。埋葬施設は検出されていない。光明山2号墳からは、縄文土器、6世紀代の須恵器が出土した。また、墳丘北東隅では円礫をつめた土坑が検出され、菊花双雀鏡1面と陶器椀が得られたとされている（向坂 1981）。3次調査の出土遺物は、現在、その所在が不明である。

1971年に作成された光明山古墳の測量図は、『天竜市史』において公表され、向坂鋼二によって、墳長83.4mという補正値が示された（向坂 1981）。この報告では、光明山古墳の後円部北側と現光明寺境内地との間に丘尾切断の痕跡があることが指摘されている。また、光明山古墳の被葬者像について、「天竜川の水利権を掌中にした一大勢力」と評価された。被葬者像については、光明山古墳から天竜川が目視できないことから、批判的な意見もある（小林 1994）。『静岡県史』において光明山古墳を紹介した川江秀孝は、同じ測量図を用いて本墳が2段築成であることを指摘し、その墳長を88.4mとする。同時に、葺石をもつこと、本墳の平面形状が大阪府大仙陵古墳と類似していることにも触れた（川江 1990）。墳丘平面形については、磐田市堂山古墳の報告書の中においても触れられ、柴垣勇夫によって大阪府上石津ニサンザイ古墳が類似する事例として示された（柴垣 1995）。

光明山古墳に樹立された埴輪については、鈴木敏則が取り上げた。本墳の埴輪は、窯窓焼成であることに加え、底部に段を有する淡輪技法をもつこと、突帯外面にハケメをめぐらす独特の特徴をもつことなどが指摘された（鈴木 1990）。埴輪の製作時期はTK208型式期を降ることはないとする。

1996年には、静岡県教育委員会の事業として関西大学考古学研究室が測量調査を実施した。（4次調査、関西大学 1998）この測量調査では、墳長82.0mという数値が示された。また、墳丘の復元検討がなされ、大阪府淡輪ニサンザイ古墳や奈良県川合大塚山古墳が類似する古墳としてあげられた。この測量調査において採集された埴輪については、山田暁によって報告されている（山田 2012）。

その後、当地では2015年に小規模な発掘調査が行われたものの（5・6次調査）、光明山古墳の墳丘にかかる本格的な発掘調査はなされておらず、正確な規模や構造については不明確である。築造時期については墳形と埴輪の編年の位置から、5世紀中頃から後半頃と考えられることが多い。

3 光明山古墳をめぐる地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

静岡県浜松市の地形は、市北部が赤石山脈系の山地帯、市南部が三方原台地と天竜川の河岸段丘及び平野部に分けられる。市の東部には天竜川が南流している。天竜川は全長213km、流域面積5,091m²の一級河川である。長野県の諏訪湖を水源とし、浜松市北部の山間部を通り、南部では広大な沖積平野を形成し、遠州灘に至る。近世以前は本流が時代によって流路が大きく変遷しており、多くの支流に分流していた。明治期に鹿島付近で流路を締め切り、堤防が築かれた以降は、ほぼ直線的に平野部を南流するようになった。

光明山古墳がある天竜区は市の北部に位置する。天竜区の中心を流れる天竜川の東岸には、二俣町大園地区を中心に広がる山塊（仮称：大園山塊）が張り出し、その南端に天竜川の支流にあたる二俣川の河口がある。二俣川の水源は光明山にあり、大園山塊の東を蛇行しつつ、山東地域で小規模な盆地状の沖積地を形成している。光明山古墳の眼前には、この盆地状の沖積地が広がっている。山東の平地には北から南の方向に突出した小丘陵地が延び、その先端に光明山古墳が築造されている。光明山古墳の標高は約74mであり、現在は古墳の北側に曹洞宗光明山光明寺がある。

(2) 歴史的環境

旧石器時代・縄文時代 天竜区とその周辺で最も古い考古資料は、浜北区根堅遺跡で発見された旧石器時代の浜北人骨である。天竜区では縄文時代から人々の活動の形跡がみられるようになる。西阿多古川沿岸にある森脇遺跡では、約七千年前の縄文時代早期の条痕文系土器が採集されている。天竜区内では最古の遺物である。また、上野の六所神社でも同時期の条痕文系土器が採集されている。縄文時代中期になると、天竜区内で複数の遺跡が存在する。上野遺跡、長石遺跡、堂山遺跡、皆原遺跡などで遺物が採集されている。また、天竜区熊のヒラシロ遺跡では、縄文時代中期から後期の竪穴住居跡が検出されており、現在は史跡公園として整備されている。山間部に単独的に立地する遺跡だが、黒曜石が一定数出土していること、南信地域、関東地方からの搬入品とみられる土器が出土していることから、他地域との交流があったことがうかがえる。縄文時代後期では、上野遺跡から石器、縄文土器が豊富に採集されている。縄文時代晚期の遺跡は、上野遺跡、金原遺跡、森脇遺跡、横山クリ下遺跡などがあり、遺跡の数が急増する。人々の活動域が急激に広がったことが分かる。

弥生時代 縄文時代に比べ、天竜区における弥生時代の遺跡は少数である。百々原遺跡、里原遺跡などで弥生土器が採集されている。二俣城跡や笛岡城跡では発掘調査を通じて弥生土器が出土しており、城郭として利用される前は弥生時代の生活の場であったことがうかがえる。また、2018年に実施した光明山古墳の発掘調査においても、墳丘の下から弥生土器が出土している。

古墳時代 天竜区において古墳時代前期の古墳は確認されていない。古墳時代中期になると、山東地域に光明山古墳群が築造される。北側の前方後円墳（光明山古墳）はこの地では大型の墳丘をもち、淡輪系埴輪を含む埴輪片が採集されている。浜松市内で最大規模の古墳であり、本書で明らかにするとおり、5世紀中頃の首長墓とみられている。南側の造り出し付き円墳（光明山2号墳）は、光明山古墳と密接な関係をもって構築されたものと考えられる。過去の発掘調査で6世紀前葉の須恵器が出土しており、築造時期をうかがう根拠とされている。しかし、現在遺物の所在が不明であ

ることに加え、詳しい遺物出土状況が分からぬいため、その築造時期は必ずしも明確にされているとはいがたい。古墳時代後期になると、二俣地区を臨む丘陵上に群集墳が多く築かれるようになる。光明山古墳から東へ250m程の距離にある西台寺山古墳群では直刀が出土しており、木棺直葬系の埋葬施設を持つ6世紀中葉の古墳とみられている。また、天竜区と磐田市の境界に位置する三蔵塚古墳群では、1994年に発掘調査が行われており、小型の横穴式石室が確認されている。出土遺物として鉄鎌や鎌があり、7世紀後半の築造とみられている。古墳以外の遺跡としては、上市場遺跡、田組遺跡、大谷遺跡などがある。山東に所在する上市場遺跡では、二俣川の付替工事中に5世紀中頃の土師器が複数出土している。また、二俣仲町の田組遺跡では二俣高校の建て替え工事中に、多数の土器類が発見され、その中に古墳時代の土師器と須恵器が含まれていた。遺物は5世紀中頃から7世紀中頃のものとみられている。光明山古墳群南西にある大谷遺跡では、暗渠排水工事中に6世紀末から7世紀中頃の須恵器が出土している。

奈良時代・平安時代 古代の二俣地域は遠江国磐田郡に属したとされる。『遠江国風土記伝』によると、壬生郷に属していたとされるが、山香郷にあたるとの見解もある。天竜区では、奈良時代・平安時代の遺物が各地で採集されている。下阿多古の上野遺跡から8世紀末から9世紀初頭の甕の破片が採集されたほか、10世紀後半の灰釉陶器が見つかっている。田組遺跡からは、8世紀前半と後半の須恵器、8世紀代から9世紀初頭の丹塗り土師器杯、10世紀の灰釉陶器などが出土している。平安時代末期には、二俣地区周辺は山香荘、浜松荘といった皇室領莊園になっている。

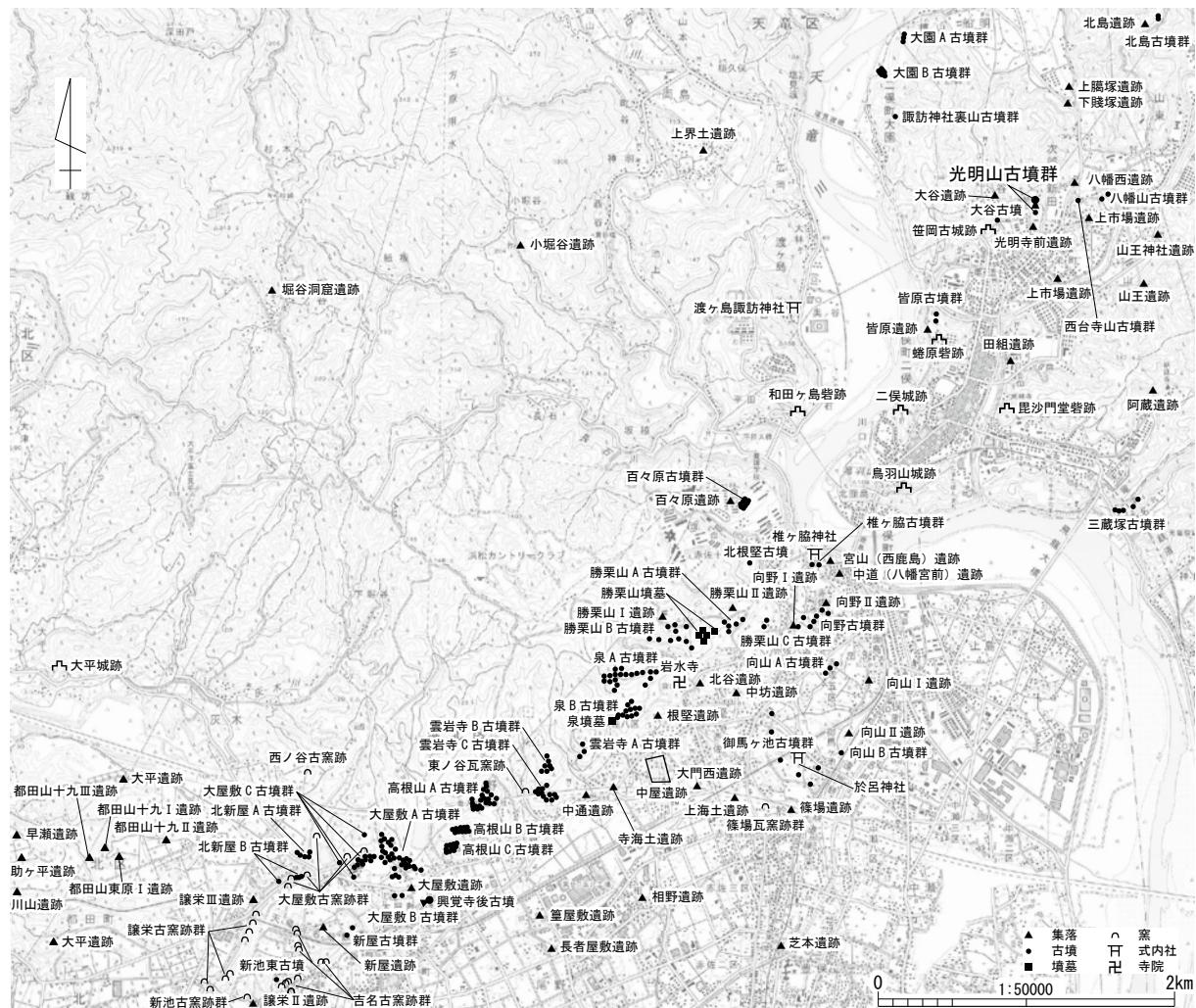


Fig.2 光明山古墳群周辺の遺跡分布

中世 『熊野速玉大社文書』によると、鎌倉時代の二俣地域周辺は国衙領に属していたとされる。鎌倉時代の遺跡は、 笹岡城跡とその周辺に多く分布しており、 大谷遺跡、 田組遺跡、 上市場遺跡などから同時代の遺物が採集されている。南北朝期になると、 笹岡城跡は軍事的な要素を備える。国衙領であった二俣地区は、 北朝方の遠江守護今川氏が治めた蓋然性が高い。いっぽう、 二俣地域の北にある犬居地域は南朝方である天野氏が治めており、 政治的・軍事的な緊張状態にあったとみられる。戦国時代の二俣地域は、 秋葉街道（信州街道）、 三州街道、 天竜川平野への街道が交錯する陸上交通の拠点であった。二俣地域には物資の流通を監視する「駄之口」が設置され、 重要視されていたことがわかる。また、 徳川氏と武田氏による二俣城での攻防戦があった地域でもある。

近世以降 徳川家康の関東移封後、 豊臣方の堀尾吉晴が遠江を領有し、 弟の堀尾宗光が二俣城に入城した。一国一城令が発布された後は、 軍事的緊張が徐々に薄れ、 二俣城や鳥羽山城は役割を失つていったとみられる。その後の二俣地域は、 森林資源の豊富さや交通の要所であるなどの理由から重要視され、 幕府直轄領となり、 中泉陣屋詰の代官が統治し近代を迎える。

4 調査の経過

（1）2017年以前の調査

1次調査 1954年に実施された静岡大学による墳丘測量調査を1次調査とする。調査は静岡県史跡に指定する目的で行われ、 その測量図は1959年に出版された『光明村誌』に掲載されている。

2次調査 1971年1月に、 光明山2号墳において静岡県教育委員会が実施した予備調査と墳丘の測量調査を2次調査とする。2号墳は当時、 児童遊園地として遊具などがおかれていた。天竜市の事業として老人福祉施設の建設計画が進められており、 建設用地として2号墳の所在地が選定された。工事着手の直前になり、 考古学研究者が古墳の存在を指摘したこと、 取扱いについて協議が行われた。遺跡の残存状況を確認するため、 静岡県教育委員会が予備調査を実施したところ、 光明山古墳及び2号墳の周溝を確認し、 2号墳についてはおよそその全長を確定できた。調査結果は第2章3に記載する。

Tab.1 光明山古墳群の調査履歴

次数	調査年	調査機関	内 容	文 献
1次	1954年	静岡大学	測量調査	光明村1959
2次	1971年	静岡県教育委員会	2号墳予備調査・測量調査	静岡県教育委員会1971、 向坂1981、 川江1990、 本書
3次	1971年	天竜市教育委員会	2号墳本調査	二俣高校社会部1971、 向坂1981、 川江1990、 本書
4次	1996年	関西大学	測量調査	関西大学考古学研究室1998
5次	2015年	浜松市教育委員会	2号墳予備調査	浜松市教育委員会2017
6次	2015年	浜松市教育委員会	光明山古墳工事立会	浜松市教育委員会2017
7次	2018年	浜松市教育委員会	光明山古墳確認調査	本書
8次	2018年	浜松市教育委員会	2号墳予備調査	本書
9次	2018年	浜松市等	測量調査	本書
10次	2018年	浜松市教育委員会	光明山古墳確認調査	本書

文献一覧

- 関西大学考古学研究室 1998 「静岡県天竜市山東所在 県指定史跡・光明山古墳測量学術調査の成果」 『静岡県の重要遺跡』 静岡県教育委員会
 光明村 1959 『光明村誌』
 川江秀孝 1990 「県史跡 光明山古墳」 『静岡県史』 資料編2 考古二 静岡県
 静岡県教育委員会 1971 『光明山古墳予備調査』 (内部資料)
 向坂鋼二 1981 「古代の天竜市域」 『天竜市史』 上巻 天竜市
 浜松市教育委員会 2017 『平成27年度 浜松市文化財調査報告』
 二俣高校社会部 1971 『光明山古墳（二号墳）発掘調査概報』

3次調査 1971年3月から6月に、2号墳において天竜市教育委員会が実施した本発掘調査を3次調査とする。老人福祉施設建設予定地について協議を重ねた結果、他に建設用地が求められない事から、当初の計画通り2号墳の所在地に建設することが決定した。開発に先立ち、天竜市教育委員会が全面発掘を行い、墳丘等の記録を作成した。詳細については第2章3で記載する。

4次調査 1996年に、光明山古墳において関西大学考古学研究室が実施した測量調査を4次調査とする。周辺地形も含めた墳丘測量図及び復元図の作成を行った。調査の結果、光明山古墳は2段築成で全長82mの前方後円墳であると報告された。

5次調査 2015年10月に浜松市教育委員会が実施した光明山2号墳での予備調査を5次調査とする。老人福祉施設解体後、造成工事が行われるにあたり、遺構の残存状況を確認するための予備調査を行った。トレントを4箇所設定し遺構や遺物の検出を試みたが、施設の基礎や過去の造成等によって大きく搅乱を受けており、墳丘や周溝の状況については明確に出来なかった。

6次調査 2015年10月、光明山古墳の東側に建設されていた弓道場の解体工事に伴い、浜松市教育委員会が工事立会を実施した。この時の調査を6次調査とする。調査の結果、造成土の下に流入土とみられる土層を確認し、円筒埴輪や朝顔形埴輪の破片が出土した。

(2) 2018年の調査

7次調査 2018年3月12日から5月25日にかけて、光明山古墳において浜松市教育委員会が実施した確認調査を7次調査とする。

3月12日には、後円部の3ヶ所にトレントを設定し（1、3、4トレント）、翌日から表土掘削を開始した。1、3トレントについては、墳頂部と墳裾の確認のため、静岡県教育委員会と協議し、トレントの延長を行った。その後、4月10日まで遺構・遺物の検出作業を行った。4トレントについては、調査期間を考慮して遺構検出は次回の調査に持ち越すこととした。また、1トレントでは遺存状態が良好な葺石を検出したが、いっぽうで実測図の作成作業が危ぶまれた。このため、関係者の協力を仰ぎ、1トレントの葺石実測図はオルソ画像を作成して原図とした。また、4月20日には、文化庁調査官が来訪し、古墳の保存について協議を行った。4月28日には現地説明会を実施した。説明会は午前と午後の2回行い、合せて約600人の市民が参加した。

5月1日から実測作業を再開し、10日に遺物の取り上げを行った。基盤層及び盛土層の確認のため、葺石が残存していない場所にサブトレントを設定し、15日に掘削を行った。また、記録作成済みの場所から埋め戻し作業を開始した。15日と18日にサブトレント設置箇所の写真撮影を行い、25日に全てのトレントの埋め戻しを完了した。



Fig.3 調査風景（7次調査）



Fig.4 現地説明会（7次調査）

8次調査 光明山2号墳の範囲内において開発行為が計画されたため、2018年8月6日から7日に浜松市教育委員会が予備調査を実施した。この調査を8次調査とする。建設予定地に幅2mのトレンチを6ヶ所所設定した（6～11トレンチ）。表土層はバックホーを用いて掘削し、人力で遺構検出を行った。記録作成後、バックホーで埋め戻しを行い、旧状に復帰した。遺構は2号墳の周溝、造り出しと光明山古墳の南側造成面が確認できた。この調査結果をふまえて、光明山2号墳は光明山古墳と一体の保護策を検討していくこととなった。

9次調査 2018年6月に光明山古墳で実施した三次元地形測量調査を9次調査とする。調査は浜松市、株式会社フジヤマ、株式会社ニコン・トリンブルが連携し、宗教法人光明寺が協力した。UAV レーザーを使用した地形図の作成のほか、航空写真の撮影を行った。調査で得られた成果は本書にも掲載する（第1章5）。

10次調査 2018年10月30日から11月30日にかけて光明山古墳において浜松市教育委員会が実施した調査を10次調査とする。この調査では、2、4、5トレンチを対象とした。2トレンチで後円部の墳裾を確認し、5トレンチにおいて前方部の墳裾を推定できるに至り、光明山古墳の墳長が83mであることが判明した。各トレンチでは葺石が確認でき、2トレンチでは良好な状態で埋没している埴輪を検出した。

10月23日には現地説明会を開催し、480人の参加者を得た。説明会終了後に遺物の取り上げを行い、サブトレンチなどを設けた補足作業を行った。11月29日には各トレンチの実測作業を終了し、翌日までに全てのトレンチの埋め戻しを完了した。

整理作業 2018年6月から2019年3月にかけて、光明山古墳群の調査にかかる整理作業を行った。整理作業は浜松市地域遺産センター（浜松市北区引佐町）において実施した。過去の調査については、既存の公表資料をまとめるとともに、3次調査の際に作成された図面を編集し、8次調査で明らかになった内容と照らし合わせて、光明山2号墳の正確な位置と古墳の規模を検討した。また、7次調査、10次調査で出土した埴輪の接合、実測、復元などの作業を行い、その成果を本書に反映させた。

現地発掘作業参加者

石岡幸、石山勝弘、伊藤敏文、影山文子、小林俊海、佐藤政治、杉山道雄、鈴木清、須部公夫、竹内誠一、辻健治、藤原豊廣、山本留美子、渡邊時次

整理作業参加者

内山敦世、北野恵子、中村玲子、林至美、原田和子、峯野洋子



Fig.5 測量風景（10次調査）



Fig.6 整理作業風景

5 検量調査

(1) 光明山古墳にかかわる既往の検量調査

光明山古墳では、1954年（1次調査）、1971年（2次調査）、1996年（4次調査）、2018年（9次調査）の4回にわたり検量調査が行われている。

1954年に作成された検量図は、等高線間隔が1mであるが、墳長82mという正確な数値が示されている（光明村 1959）。この図面において、墳丘の東側で地形の改変が著しいこと、墳丘の西側と南側で墳裾部分がいずれも削り取られていることが読み取れる。1954年検量図にみられる古墳形状の変形は、2018年検量図においても踏襲されている部分が多い。現在みられる光明山古墳の形状は1950年代から大きくは変化していないものといえるだろう。

1971年に行われた検量では絶対標高値が用いられ、等高線間隔が50cmで検量図が作成された。この図は標高値に1.5mほどの違いがみられるが、本墳が2段築成であることを明確に読み取ることができる。先述のとおり、この検量図から、向坂鋼二は墳長83.4mという補正值を提示し（向坂 1981）、川江秀孝は墳長88.4mと復元した（川江 1990）。

1996年の4次調査で作成された検量図（関西大学 1998）は、25cm間隔の等高線で示され、光明寺境内から光明山2号墳がある丘陵全体に及ぶ、精緻なものである。後円部墳頂や前方部頂における最高地点の標高（74.055m、72.835m）は正確で、2018年に実施した調査においてもその妥当性が追認できた。この検量図では、後円部北側の丘尾切断状況も明瞭に示された。

報告中で示された墳丘各部分の復元的な数値は以下の通りである。墳丘全長82.0m、後円部径44.4m、後円部高8.0m、前方部幅53.6m、前方部高7.6m、前方部と後円部の比高差0.4m。

この他、正確な撮影年は不明ながら、天竜市は光明山古墳の垂直写真を撮影している（Fig.7）。

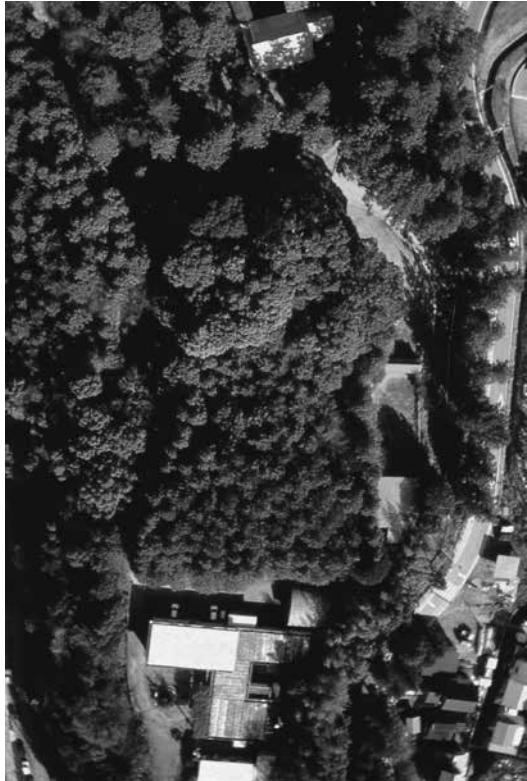


Fig.7 墳丘航空写真

(2) 光明山古墳 2018年の検量調査

2018年、浜松市と株式会社フジヤマおよび株式会社ニコン・トリンブルの共同調査として、UAVレーザ計測を用いた三次元地形測量を実施した（9次調査、Fig.9・10）。この調査による等高線表示は20cm間隔とし、古墳北側の光明寺境内地から光明山2号墳を含む丘陵全体を対象とした。以下、検量図から読み取れることがらについて触れておきたい。

立地丘陵 光明山古墳は、南北方向に舌状に延びる丘陵尾根に立地する前方後円墳である。丘陵と下方平坦面の高さの違いは、丘陵南側平坦面（標高49.0m）を基準にすると、後円部北側の墳丘外平坦面で17.5m、後円部墳頂で25mである。古墳はほぼ南北に主軸をとり、前方部を南に向ける。古墳主軸は座標北から6°程度東に傾いている。

墳丘外施設 1971年に実施された2次調査では、光明山古墳の南側に「周溝」があったとされている。

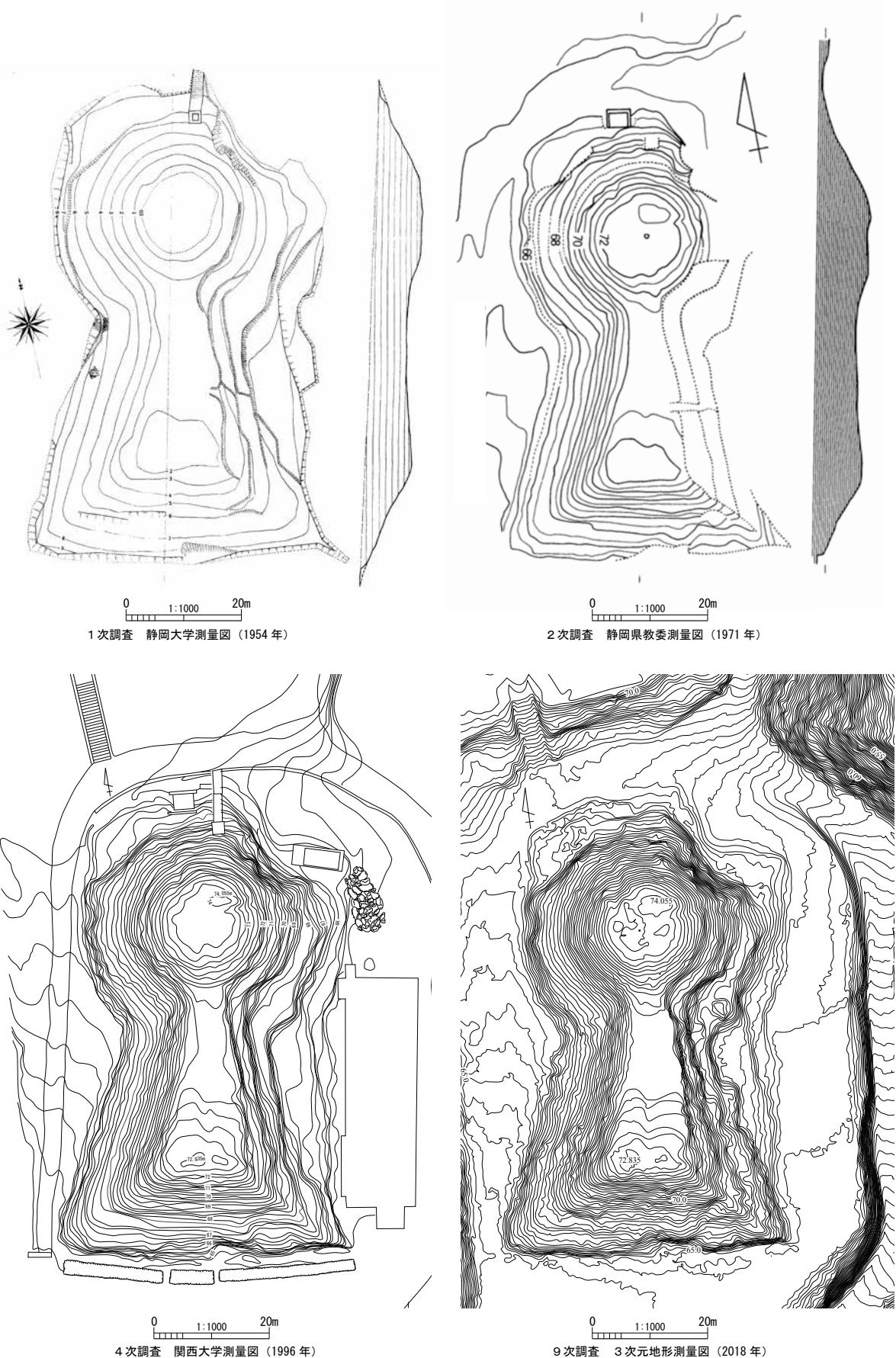


Fig.8 光明山古墳測量図集成



Fig.9 光明山古墳群測量図

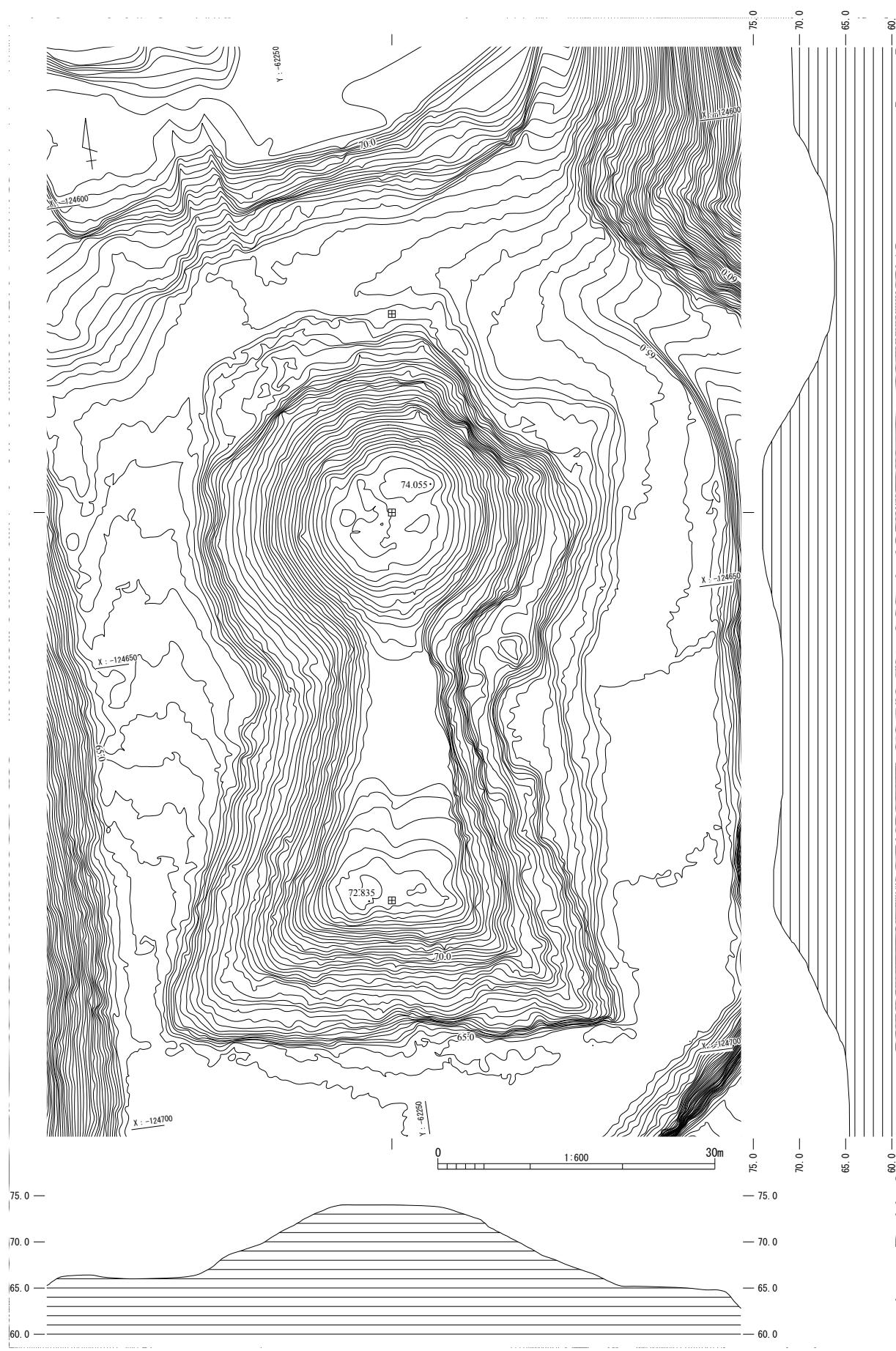


Fig.10 光明山古墳測量図

検出された遺構は、幅 10 m、検出面からの深さ 20cm ほどのごく浅いもので、一般的な周溝とは異なる。この遺構は周溝というより、古墳の造営にあたって地形を改変した造成面と呼べるものである。

2018 年の測量時点では、光明山古墳の東側と南側においては、施設解体に伴い広範囲に碎石が敷かれており、測量調査では、こうした造成面の存在をうかがうことができない。ただし、状態な良好な墳丘西側から北側については、発掘調査で確認したように、墳裾から外側に 10 m 程の平坦面が広がっているとみられる。光明山古墳には周溝は伴わないと評価しうるが、墳丘の周囲にはそれに類した造成面が巡っているといえるだろう。造成面は北側が高く、南に向かって緩やかに傾斜している。造成面の最高地点の標高は後円部の北西側で 66.5 m であり、前方部南端では 64.8 m である。南北 80 m ほどで造成面の比高差は 1.7 m あり、前方部がより高くみえる立地といえる。

後円部の北側は光明寺の境内にあたるが、古墳の造成に伴って丘尾を切断している状況が確認できる。丘尾を切断した北側の法面は地形の改変が顕著であるが、後円部の形状に合わせて弧状を呈する。前述のとおり、光明山古墳の周囲には、墳裾から幅 10 m ほどにわたり平坦な造成面が形成されているとみられ、丘尾を切断した法面形状も造成面の広がりを反映したものとみられる。

墳丘 墳丘は精美な前方後円墳の形状を反映している。墳裾部分を中心に改変がみられるが、前方後円墳の形状が良好にうかがえる。とくに後円部、前方部ともに墳頂部の遺存状態は良好で、埋葬施設などの破壊は及んでいないものと推定できる。墳丘の西側および南側で 2 段築成の状況が明確に読み取れる。

(2) 光明山古墳 2 号墳の測量図

2018 年の時点では光明山 2 号墳の位置には碎石が敷かれており、緩やかに南に傾斜する平坦面が広がっているのみで古墳の形状をうかがうことはできない。光明山 2 号墳が埋没している部分の地表面の標高は 64.0 m 前後である。光明山古墳の南裾地表面から比べると 1 m 程度低い。

光明山 2 号墳については 1971 年に行われた 2 次調査で現況地形が測量され、続く 3 次調査によつて全面発掘後の状況が作図された。



Fig.11 光明山 2 号墳測量図

『静岡県史』で示された光明山 2 号墳の測量図（川江 1990、Fig. 11）は表記された等高線に 2 種があり、混乱がみられるものの、北側の周溝状の区画や墳裾の位置を読み取ることができる。Fig. 11 から読み取れる光明山 2 号墳の規模は、直径 32 m、墳長 38 m、造り出しの幅 10 m、造り出しの長さ 5 ~ 6 m である。

古墳の北側には幅 4 m、深さ 1.2 ~ 1.7 m ほどの周溝が認められる。この溝は通常の周溝というよりも、光明山 2 号墳が立地する平坦面を区画するような性格をもつもので、規模は異なるものの光明山古墳北側にある丘尾切断部に近い。古墳の東西は尾根の崖が迫っており、周溝がめぐるかは必ずしも明確でない。また、造り出しの南側には浅い周溝が認められるが、明確に地形が区切られるような規模ではない。

第2章 発掘調査の成果

1 調査区の設定

2018年の調査では、光明山古墳の見かけ上の主軸を求め、後円部の中心に基準点P1を、前方部先端にP2を設けた。また、P1から主軸の直交方向を振り分け、調査区設定の基軸線とした。トレントの位置は調査区の座標系から計測し、その後、国家座標値を対応させた。標高値は丘陵を下った位置にあるベンチマークから、レベル移動によって求めた。発掘調査に用いた主軸は、国家座標の経線から7度40分12秒東に傾いている。

計測はトータルステーションを用い、主軸上に1、2、5トレントを、主軸との直交方向に3、4トレントを設定した。また、第2節で報告するとおり、光明山2号墳の予備調査を行った6～8トレントについても、主軸と並行する方向に調査区を設定した。9～11トレントについては光明山2号墳の墳丘検出を目的に任意の方向に調査区を設けた。なお、1、3トレントは7次調査、2、4、5トレントは10次調査、6～11トレントは8次調査において調査を実施した。

2 光明山古墳

(1) 1トレント

1トレントは後円部の主軸上、北側斜面に設定した調査区である。調査の結果、上段墳丘と中段平坦面を確認し、墳丘斜面には葺

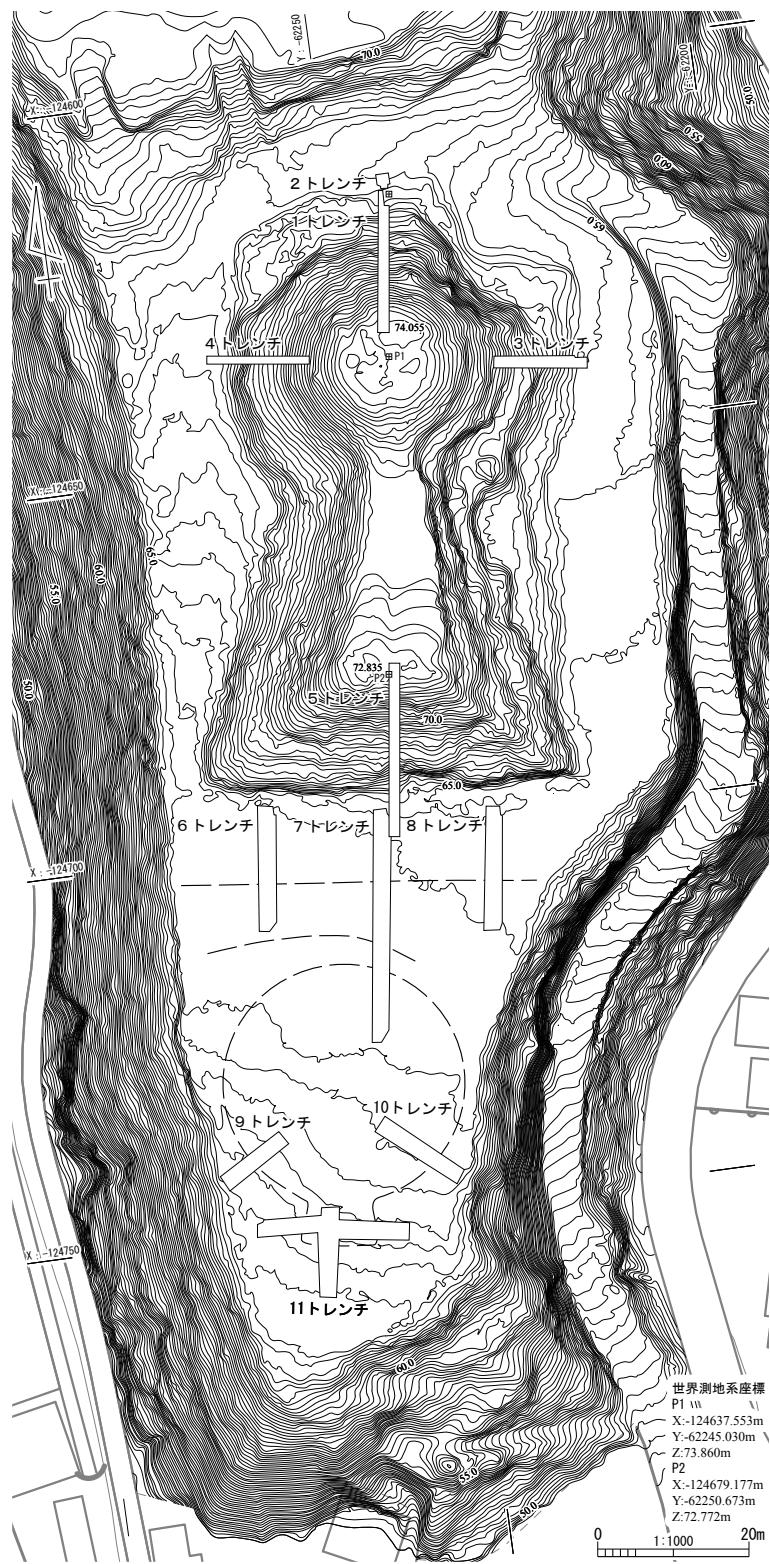


Fig.12 トレント配置図

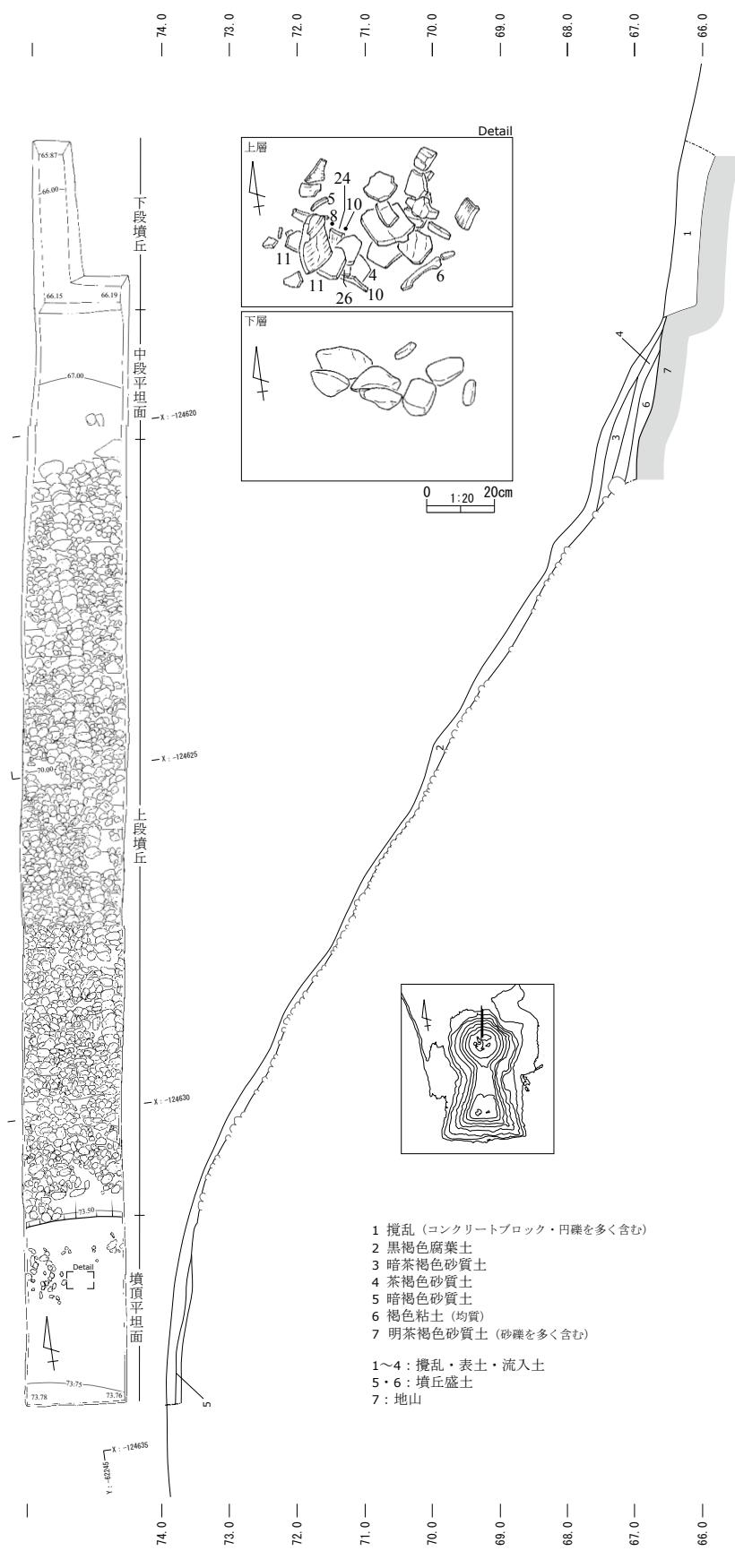


Fig.13 1 トレンチ実測図

石が施されていることが判明した。葺石の遺存状態は極めて良好で、基底部から墳頂部まで残存していた。

葺石の基底部は長軸 30 ~ 40cm 程の大きな石材が並べられており、その上に基底石より小ぶりな長軸 20cm 前後の石材が積まれていた。葺石の石材は円礫ではなく、角張ったものが多い。葺石の石材は、天竜川の河原ではなく、近傍の丘陵地から石材を調達したとみられる。墳丘斜面には、葺石石材と比べて若干、大きめの石材を並べた区画石列が認められた。区画石列は、基底部から途切れることなく、墳頂部に向かっている。調査区の範囲ではすべてを確認できなかったが、区画石列は墳頂平坦面まで繋がっているものと考えられよう。墳頂付近では、墳丘の天端とみられる石列も一部検出できた。

中段平坦面は幅 2 m 程度ある。その外側は搅乱が及んでいたため下段墳丘の確認はできなかった。上段墳丘の高さは約 6.8 m、傾斜角度は約 32 度である。後述する 2 トレンチの調査成果から求めた、北側主軸上の後円部高さは約 8.5 m である。

1 トレンチの表土や流入土内から埴輪片が多く出土した。また、墳頂部の搅乱土内に埴輪片の集積が確認できた。埴輪の器種は円筒埴輪と朝顔形埴輪であった。搅乱土内の埴輪は、元々墳頂に立てられていたものが、崩れて流れ込んだものとみられる。墳頂部の埴輪の集積の下層

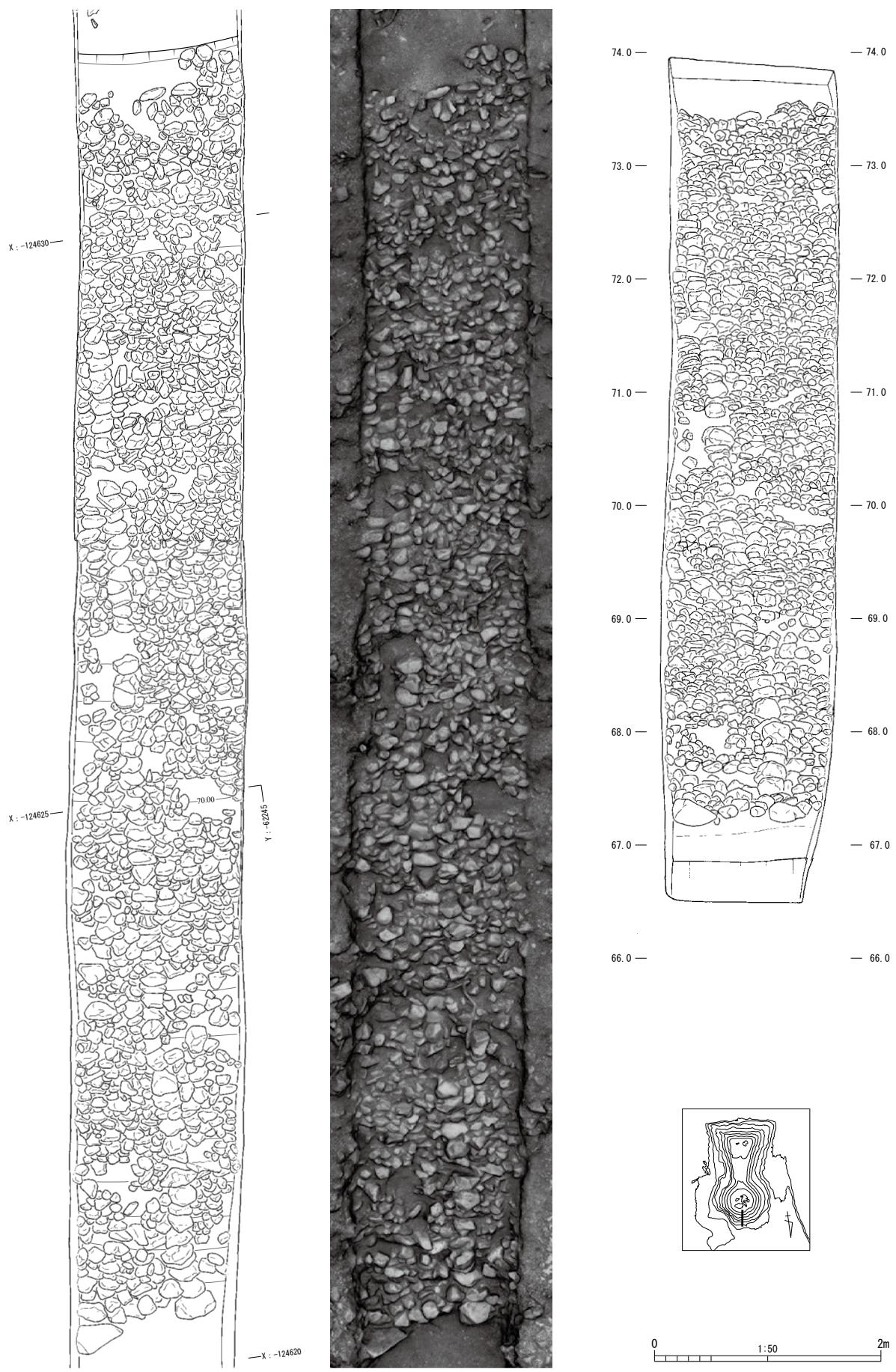


Fig.14 1 トレンチ葺石詳細

に、10～15cmの礫の集積が検出できた。樹立された埴輪の固定に用いられた石である可能性があるが、原位置を留めた埴輪は確認できなかったため、用途の確定はできなかった。

1トレンチの中段平坦面から墳裾方向にかけてサブトレンチを設定し、一部墳丘の断ち割りを行った。中段平坦面の上部は、盛土（6層：褐色粘土）が用いられている。6層の下部は地山であるが、後述する4、5トレンチで確認できたような旧表土はみられない。墳丘の造成に伴い、地山を削り出して墳丘平坦面の基礎的な形状をつくり出し、その上に整地して中段平坦面を成形したものと考えられよう。葺石の基底石は、この盛土層の上に乗っている。上段墳丘の葺石の構築は、中段平坦面の整地の後に行われている可能性が高い。中段平坦面にみられる盛土層はほぼ水平であるが、中段平坦面の北側に向かって薄くなっている。本来は整地層として均等な厚さで盛土されていたものが、経年変化により浸食されたものと考えられる。

(2) 2トレンチ

2トレンチは、1トレンチの北側において下段墳丘の端部（墳裾）の検出を目的に設定した。調査区の南端で下段墳丘の基底石列が検出できた。これにより、主軸北側の墳裾が確定した。墳裾の位置は、1996年に行われた測量調査（4次調査）で想定していた箇所より1m程外側にあたる。1トレンチで検出した中段平坦面と比較すると、下段墳丘の高さは約1.7m、下段墳丘の傾斜角度は約23度である。基底石は長軸30cm程の石材が用いられており、基底石より上部の葺石はほとんど失われていた。また、基底石の北側で遺存状態の良い円筒埴輪（Fig. 26-1）と朝顔形埴輪（Fig. 29-18）が出土した。これらの埴輪は中段平坦面から転落したものとみられる。

2トレンチの西側にサブトレンチを設定し、基底石付近から北側の地形と土層堆積状況を確認した。墳裾部分では地山の上に直接基底石が据えられており、墳丘の外側（北方向）に向かってさらに地山が傾斜していることが判明した。この傾斜は丘尾切断部にあたり、地山を削りだした際に形成された基壇状の地形（以下、基壇と呼ぶ）を反映したものとみられる。丘尾切断部の底面から基底石下面に至る基壇の高さは約25cmである。

埴輪や葺石石材の多くは、初期流入土（4層：暗褐色粘質土）の上部から出土している。基壇を含む丘尾切断部がある程度埋まってから、埴輪や葺石が転落したものと考えられよう。

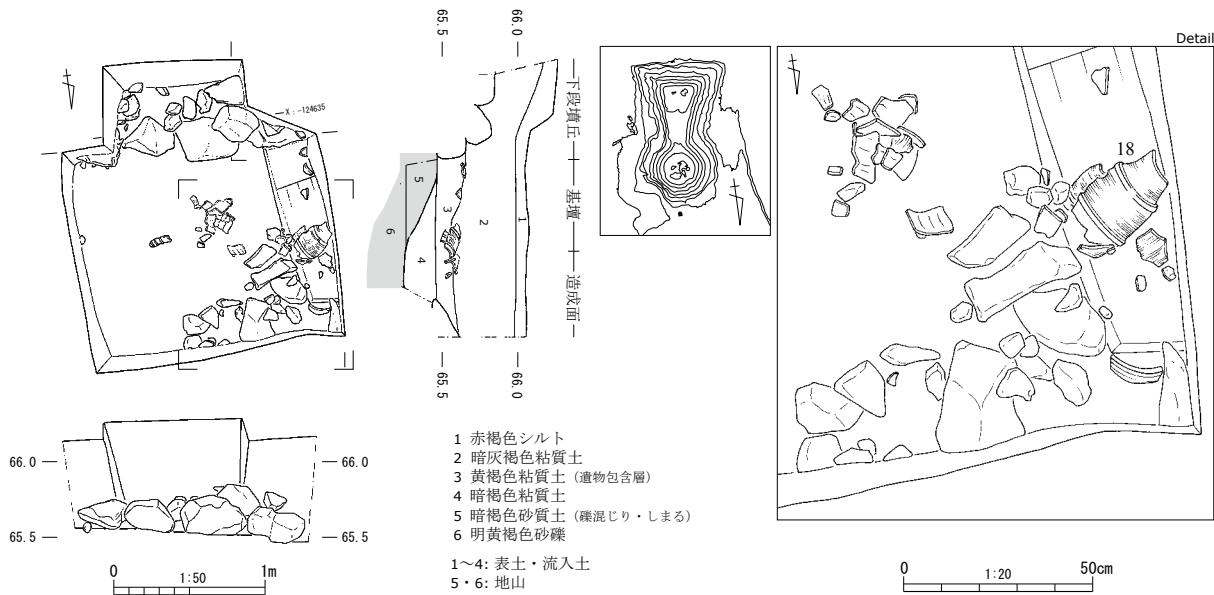


Fig.15 2トレンチ実測図

(3) 3トレンチ

3トレンチは後円部の東側に設定した調査区である。この調査区においては上段墳丘、中段平坦面、下段墳丘が確認できた。上段墳丘、下段墳丘ともに、基底部を中心に葺石が良好に残存している。葺石石材の大きさは1トレンチと同じく、基底石が長軸30cm前後、その他は長軸20cm前後である。石材の大きさは若干であるが、上段墳丘の方が小さい傾向にある。下段墳丘斜面においては、葺石の区画帯も確認できた。

下段墳丘の基底石は、2トレンチで判明した状況と同様、地山を削り出した基壇の上に乗せられている。基壇の高さは50cmほどである。基壇部分には初期流入土（9層：茶褐色粘土、8層：暗褐色粘土）が堆積している。この堆積物は、2015年に実施した6次調査において、「周溝」埋土と報告された層位と同一のものと考えられる。

中段平坦面では円筒埴輪（Fig. 28-2, 3）がまとまって出土した。これらの埴輪は、口縁から第2段まで遺存するもので、原位置から大きく離れていないものと捉えられる。本来は、中段平坦面に樹立されていたものが崩れたものとみてよいだろう。円筒埴輪は、中段平坦面の中でも外側に近い位置で出土している。円筒埴輪の樹立位置は必ずしも明確でないが、埴輪列は上段墳丘の基底石列から離れた位置に設定されていたと推定できるだろう。また、この円筒埴輪は調査区の南壁に沿って出土したが、その北側には埴輪片の集積はみられない。この状態が埴輪列の状態を反映したものと考えると、埴輪どうしの間隔はトレンチ幅の1.5m以上である可能性がある。

3トレンチにおける下段墳丘の高さは約1.9m、上段墳丘の高さは約7.1m、後円部全体の高さは約9.0m、中段平坦面の幅は約2.2mである。上段墳丘の傾斜角度は約30度、下段墳丘の傾斜角度は約28度である。

3トレンチの上段墳丘及び中段平坦面から下段墳丘の2ヶ所にサブトレンチを設定し、墳丘内の土層を観察した。上段墳丘の土層では墳丘盛土層を確認した。盛土は褐色系の粘質土が中心であり、ほぼ水平に積まれている。上段墳丘に残存する葺石の直近までサブトレンチをいたが、葺石を据

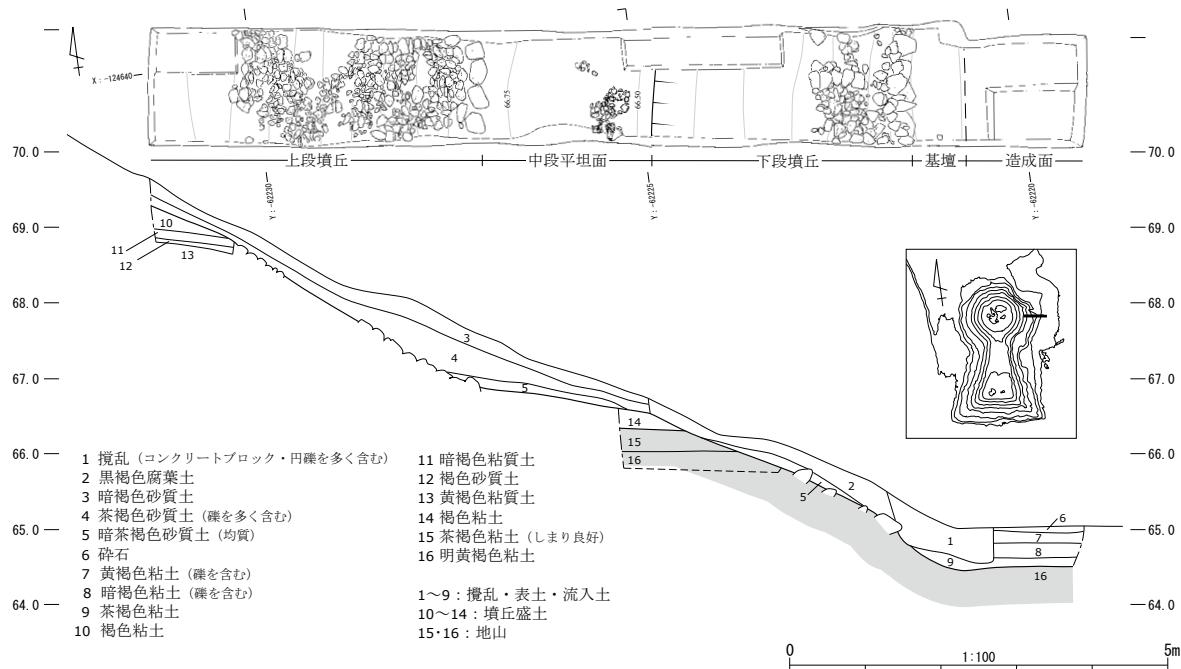


Fig.16 3トレンチ実測図

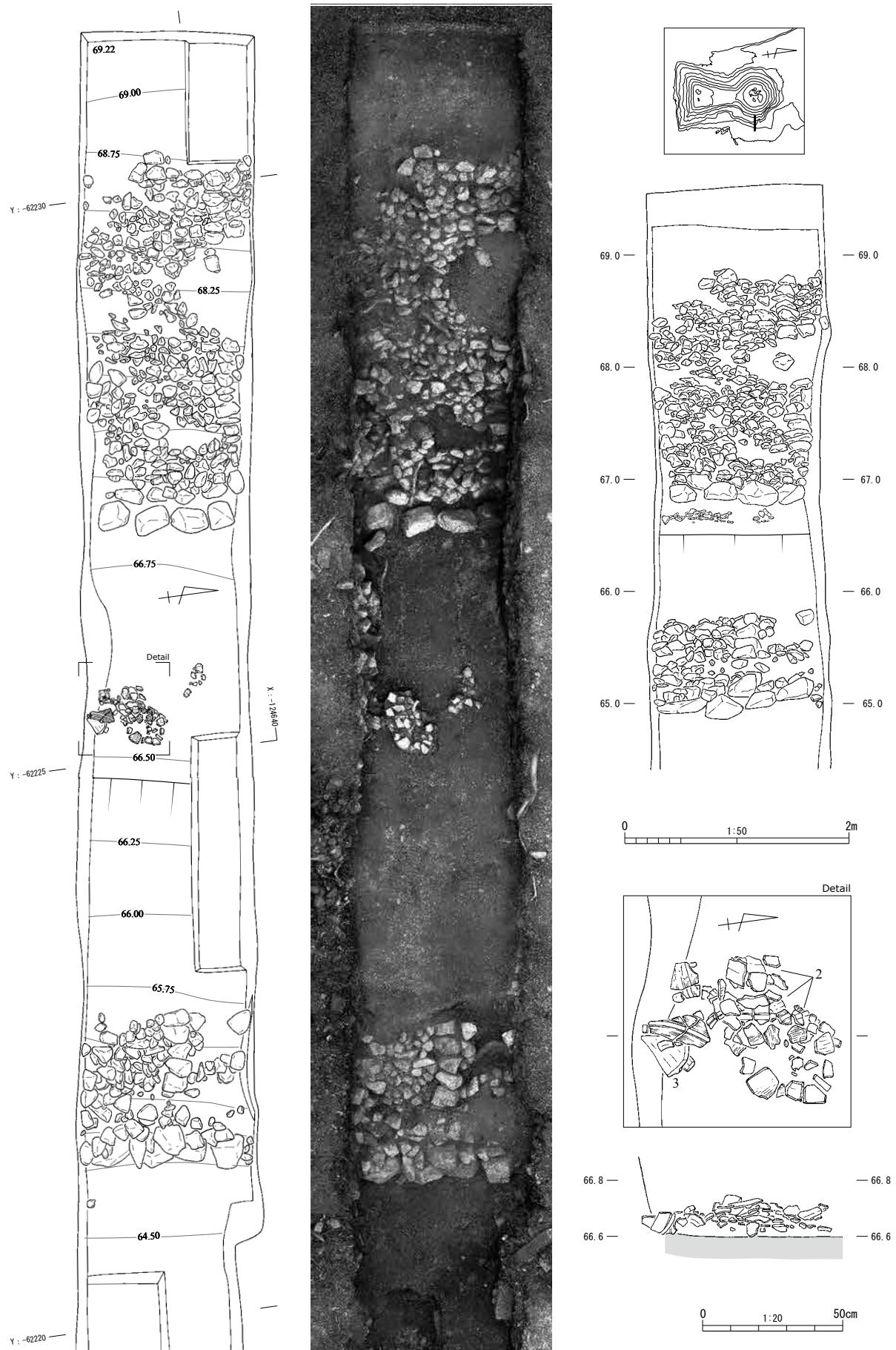


Fig.17 3 トレンチ葺石等詳細

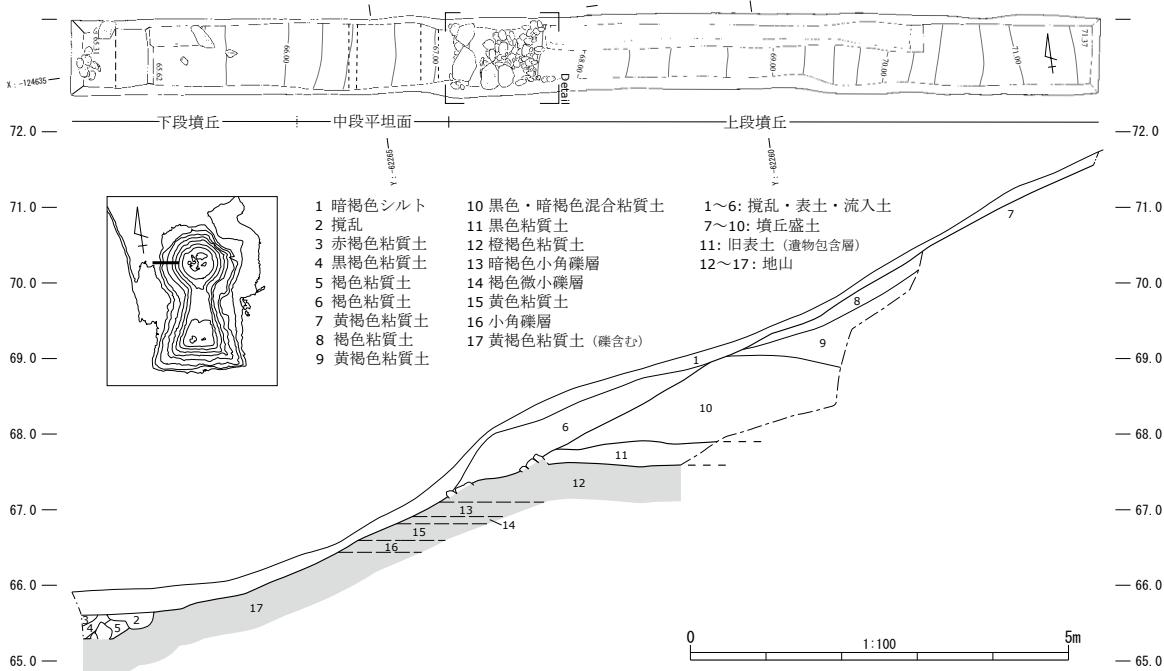


Fig.18 4トレンチ実測図

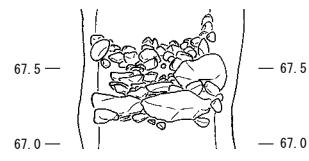
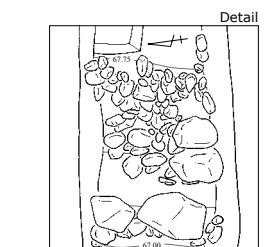
えるための明確な整地土は確認できなかった。また、中段平坦面から下段墳丘に設定したサブトレンチでは、中段平坦面から上で盛土層、下段墳丘で地山を確認した。地山は中段テラス部付近では茶褐色粘土（15層）であるが、下層に明黄褐色粘土層（16層）がある。1トレンチと同様に、下段墳丘の構築にあたっては地山を削り、中段平坦面から上は地山の上に盛土をして墳丘を構築している。14層にあたる褐色粘土層は、削り出した地山の上に積まれた整地層で、中段平坦面に埴輪を樹立する際に同時に盛られた地層である可能性が考えられる。

(4) 4トレンチ

4トレンチは後円部主軸に直交する軸上の西側に設定した調査区である。このトレンチでは、上段墳丘の葺石が一部残存していることを確認した。上段墳丘の高さは約6.6m、傾斜角度は約28°である。葺石は基底石とその上部1m程の範囲で残存していたが、基底石以外の石材の大きさは長軸10cm前後で、他の調査区で検出した葺石と比べて小さい。墳丘表面の葺石が抜け落ち、裏込めの石が残存している可能性も考えられる。ただし、他の調査区では裏込め石のような石材は確認されていない。基底石については他のトレンチと同様に長軸30～40cmの石材が使用されている。中段平坦面以下は後世の掘削で失われていたが、3トレンチの下段墳丘の傾斜から考えると墳裾が調査区の外側にある可能性が高い。

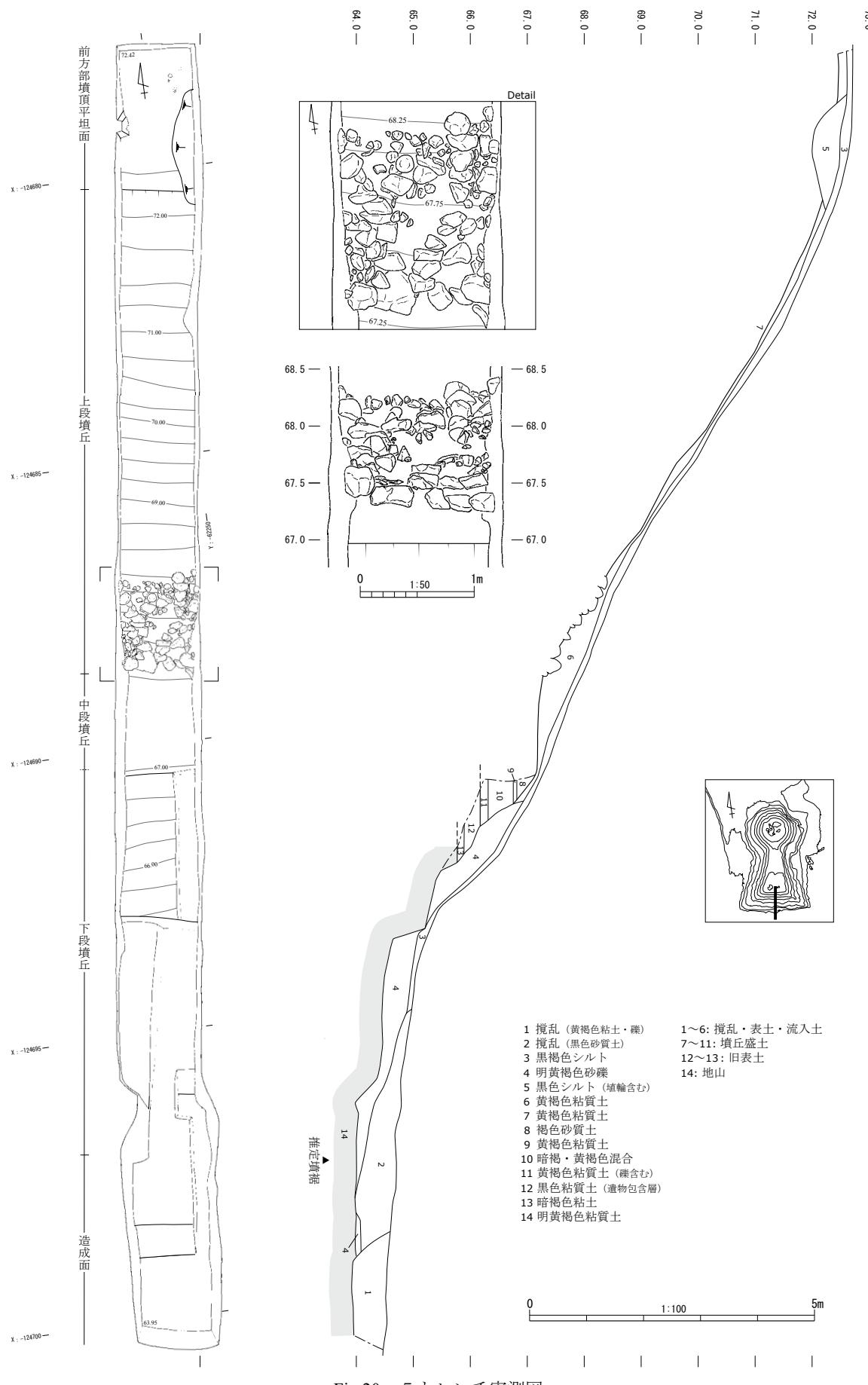
墳丘下段斜面で露出していた地山では、粘質土層と礫層が相互に堆積していることが確認できた。地山に含まれる礫は葺石に使用されるものと類似している。出土遺物は他のトレンチと比べて少ないが、表土・流入土から埴輪片が出土している。

上段墳丘の斜面にサブトレンチを設定し、墳丘内の土層を観察した。上段墳丘の葺石が残存する部分から下は地山の削り出し、残存してい



0 1:50 1m

Fig.19 4トレンチ葺石詳細



ない上段墳丘の斜面は盛土で構築されている。地山の削り出し部分については葺石がよく残存していたため、盛土部分と地山部分で葺石の残り方に差があるとみられる。また、サブトレーンチ内の土層には旧表土層とみられる黒色粘質土層（10層）があり、弥生時代後期の台付甕などが出土した。古墳時代以前には集落が存在した可能性がある。旧表土層の上には、黒色粘質土と暗褐色粘質土の混合層（9層）の厚い盛土がされていたが、混合層内での分層はできなかった。

（5）5トレーンチ

5トレーンチは前方部南側の主軸上に設定した調査区である。上段墳丘と中段平坦面を確認したが、下段墳丘は改変が著しく、墳裾部についても後世に掘削されており、古墳に伴う地形は残っていなかった。8次調査で検出した地山の高さや他の調査区の下段墳丘の傾斜等から検討すると、墳裾は後円部中央に設定した基準点（P1）から南へ60m前後の位置に相当するとみられる。2トレーンチで検出した墳裾から計測すると、墳長は83m（計測値82.8m）になる。なお、2トレーンチや3トレーンチでは、墳裾の外側に地山を削り出した基壇があることは留意すべきである。前方部南側にも基壇を想定することが妥当とみられるが、現状は下段墳丘の基底石は確認できない。このため、墳長の計測値には数十cmの誤差が生じる可能性がある。上段墳丘の高さは約5.5m、傾斜角度は約30°、下段墳丘の高さは約3.3m、傾斜角度は約26度である。前方部全体の高さは約8.8mである。

墳頂部では、搅乱土内から埴輪片が多く出土した。葺石は上段墳丘の一部で残存しており、基底石列が確認できた。中段平坦面の幅は約1mで他の調査区と比べると狭いことから、中段平坦面南側も削られているとみられる。トレーンチ全域の表土内からは埴輪片が出土しているが、中段平坦面の墳丘面では埴輪の集積はみられなかった。

墳丘下段にサブトレーンチを設定し、4トレーンチでもみられた旧表土層（12層：黒色粘質土層）を確認した。5トレーンチの旧表土層は4トレーンチで検出した標高よりも低く、古墳時代以前の地形も現在と同様、北から南へ下がる傾斜地であったとみられる。また、前方部の構築にあたっても、下段墳丘では地山を削り出し、中段平坦面から上は盛土をしていることが確認できた。5トレーンチにおいては墳裾以南までトレーンチを拡張したが、地山の直上まで搅乱が及んでいた。ただし、2次調査と8次調査で検出した浅い溝状遺構と同様に、わずかに地山の落ち込みが確認できた。周溝と呼ぶには浅い形状であり、古墳築造時の造成面と捉えておきたい。

（6）小 結

2018年の発掘調査によって、光明山古墳が2段築成であること、墳丘斜面に葺石が施されていることが確認できた。葺石は後円部の北側で非常によい状態で残存していた。また、上段墳丘が下段墳丘に比べると4倍近くの高さがあり、特徴的な形状をしていることも判明した。主軸上の北側では墳裾の基底石列を検出し、南側では周囲の地形や測量結果から墳裾の位置を割り出した。これにより、古墳の全長が83mであることが確定できた。

墳丘の外側についてはほとんどの場所で搅乱が及んでいたが、後円部北側の2トレーンチ及び前方部の5トレーンチでは、墳丘の外側に浅い溝状遺構（造成面）が存在することを確認した。また、下段墳丘基底石の最下段には地山を削り出した高さ25～50cmほどの基壇が巡っている。墳頂部と中段平坦面では、埴輪片の集積が確認できたことから、埴輪列が存在していたと考えられる。埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪のみであり、形象埴輪は出土していない。

3 光明山2号墳

(1) 概要

光明山2号墳は、天竜市の老人福祉施設「やまゆり荘」の建設に先立ち、1971年に全面発掘調査が行われた古墳である。静岡県教育委員会による予備調査を2次調査、天竜市教育委員会による本調査を3次調査とする。発掘調査後に墳丘上面が造成され施設が建築されたが、2015年3月をもって廃止となり、建物は解体撤去され更地となった。2015年10月には建物解体に伴い予備調査を実施している（5次調査）。

浜松市教育委員会は、2018年に開発計画を受けて、光明山古墳の前方部南方側一帯を対象に、予備調査を実施した（8次調査）。この調査は、光明山古墳南側の外周施設の有無と、光明山2号墳の残存状況の確認を目的に実施した。調査の結果、建物基礎で攪乱されている部分もあったが、光明山古墳にかかわる造成面や、2号墳に伴う周溝などの遺構が残存していることが判明した。

以下、2次、3次、8次調査の成果について報告する。

(2) 2次調査

施設が建設された1971年以前、光明山古墳の南側には、滑り台やブランコ、砂場などが配された児童遊園地があり、立木がある中央の小高い部分に2号墳が存在した。当時は周知の古墳ではなかったが、地元考古学研究者からの指摘を受け、静岡県教育委員会により1971年1月に予備調査が行われた（2次調査）。

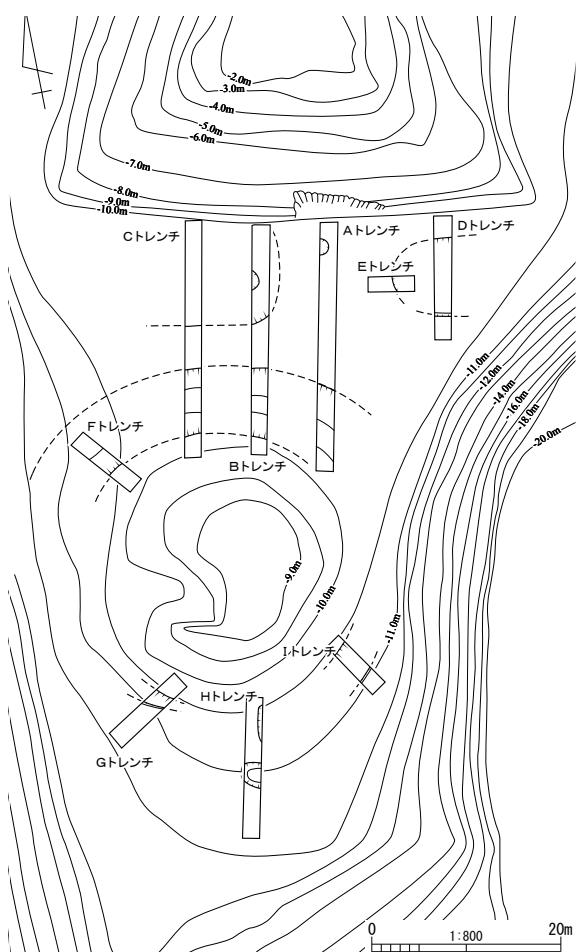


Fig.21 2次調査検出遺構配置図

光明山古墳の前方部南裾から2号墳までの間にA～Cの3ヶ所のトレンチ、前方部南裾東半のD・Eの2ヶ所のトレンチ、2号墳の東・西・南の周溝部分にF～Iの4ヶ所のトレンチを設定して、調査を行った（Fig. 21）。

その結果、光明山古墳の南裾において浅い溝状の遺構が確認できた（A～Eトレンチ）。この遺構は周溝と呼ぶには浅いものであり、本書では造成面としておく。造成面は墳裾から幅10mほど巡っており、埋土中から埴輪片が出土している。また、2号墳は幅数mの周溝を巡らせた円墳で周溝を含めた全長は40mを超えると推定された。

(3) 3次調査

2次調査の結果を受け、1971年3～6月に本発掘調査（3次調査）を天竜市教育委員会が実施した（Fig. 22、23）。正式な報告書は刊行されていないが、簡易な中間報告が作成されている（二俣高校社会部 1971）。

埋葬施設は墳丘の流失や塗壁用粘土の採掘などの攪乱により、古くに失われたらしく、確認されなかった。墳丘は地山を削り出して築造されたもので、墳丘内には旧表土層の黒色土層が確認された(Fig. 23)。旧表土からは縄文土器が出土している。

発掘調査の結果、墳丘の北側には周溝状の切断部があり、南側では方形の突出部(造り出し)がつながることが判明した。造り出しの外側には小規模な区画溝がめぐっているが、溝は、墳丘の東西には至っていない(Fig. 11、22)。

墳丘規模は、南北31m、東西28m、高さ2.8m(北側周溝下から墳頂)、造り出しは長さが5.8m、幅が9.6mと記録されている。南北・東西の規模は、周溝内側の上端での計測であり、周溝底の墳裾であれば32～33mとなる。

出土遺物は、周溝北側から須恵器の高壺脚部、南側から波状文が施文された須恵器壺の頸部破片が検出された。また、墳丘北東隅において、円礫をつめた土坑が発見され、紙に包み編物を被せた菊花双雀鏡1面と陶器碗が出土したとされている(向坂1981)。ただし、出土遺物は現在いずれも所在不明である。

(4) 8次調査

2018年に実施した8次調査はトレーニングの幅を2mとし、光明山古墳の南側に3ヶ所(6～8トレーニング)、光明山2号墳の位置に3ヶ所(9～11トレーニング)、調査区を設定した(Fig. 12)。6～8トレーニングは光明山古墳の調査区主軸と並行させた。いっぽう、9～11トレーニングは任意の方向とした。

6～8トレーニング 光明山古墳の前方部の南側で、旧やまゆり荘の用地北側にあたる場所に設定した南北方向のトレーニングである。前方部の南裾部は古くに削平され、畑地となっていたよう耕作層が確認された。埴輪は耕作層の下部から多く発見されたが、墳丘から崩落したもので、原位置は留めていない。転落した埴輪は、静岡県史跡指定地の境界柵から南3～5mあたりまで認められた。2次調査では、前方部の南側に幅10m、深さ10～20cmほどの浅い溝状の遺構が確認された。周溝と呼ぶには浅い遺構であり、光明山古墳造営に伴う造成面と呼んでおきたい。遺構面直上まで攪乱層が及んでいるものの、8次調査においてもその形状が追認できた。

7・9・10トレーニング 7トレーニングの南側と、9・10トレーニングで2号墳の周溝、11トレーニングで2号墳の造り出しを確認した。3次調査で周溝は完掘されたが、その後の本格的な造成に先立ちまず周溝が埋戻され、建設工事が進められたために、周溝の形状は地表下に残存することになったと考えられる。

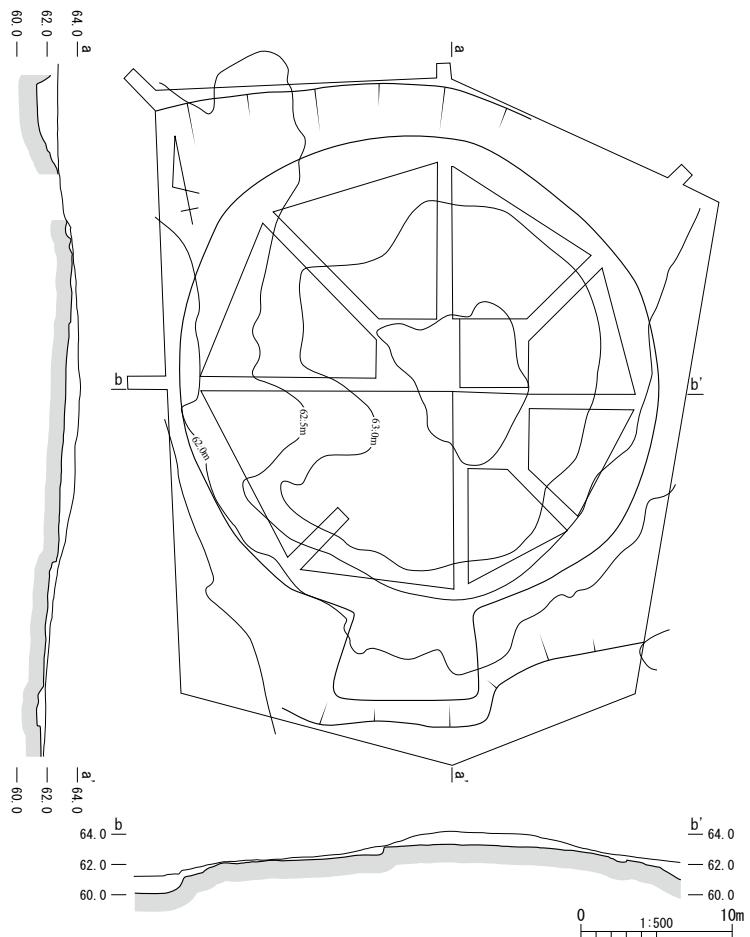


Fig.22 光明山2号墳検出遺構

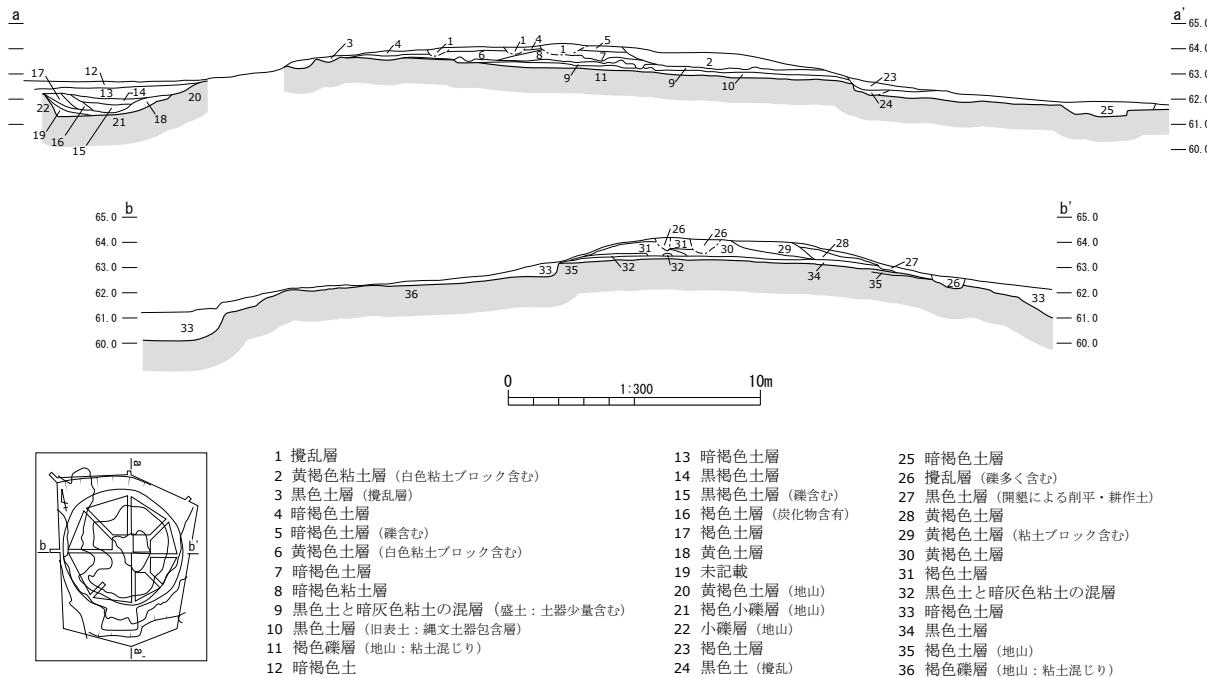


Fig.23 光明山2号墳土層断面図

7トレンチで検出した周溝は、墳丘部の地山を削った土で埋められていた。10トレンチでは山礫、9トレンチでは廃土（低地からの流用土）で埋められていた。7トレンチの北側周溝は、調査後に流入した褐色砂質土層の上に、分解した腐植土のこげ茶色有機質土が存在しており、造成前に相当な期間放置されていたことがわかる。

11トレンチ 造り出しは、3次調査において墳丘南側で確認された。造り出しの南側にも浅いが周溝があり調査後に碎石により埋め戻されていた。造り出しの東西は、周溝の外側での立ち上がりがなく、溝形状は確認されなかった。

出土遺物 8次調査では光明山古墳から転落したとみられる埴輪片が出土した。埴輪は6～8トレンチから出土している。いずれも、埴輪は細片化と風化が顕著であり、原位置から離れていることを伝えている。

(5) 小 結

墳丘 既に3次調査で明らかにされたように、光明山2号墳は造り出し付き円墳であることが8次調査によっても確認できた。

8次調査の7、9、10、11トレンチで検出された周溝から、墳丘規模は墳丘裾部で計測して直径32m、造り出しを含めた南北全長は38mと推定される。規模は、3次調査の成果と比べても計測位置の違い程度の誤差で、ほぼ一致する。高さについては、3次調査時では北側周溝底から2.8m存在したが、現状は造成されて平坦であり、北側周溝の底面は地表下1.4mにある。なお、1971年に作成された測量図の標高値は1.5mほど低いことから、Fig. 22やFig. 23の標高値も同程度の補正が必要である。

造り出しの規模は3次調査の記録では長さ5.8m、幅9.6mとされている。造り出しの上には旧表土（10層）が確認できなかったことから、本来、造り出しは円丘部と比べて低平であったとみられる。8次調査においても造り出しが確認できた。造り出し南側の周溝は認められたが、東西の周溝は不明瞭であった。

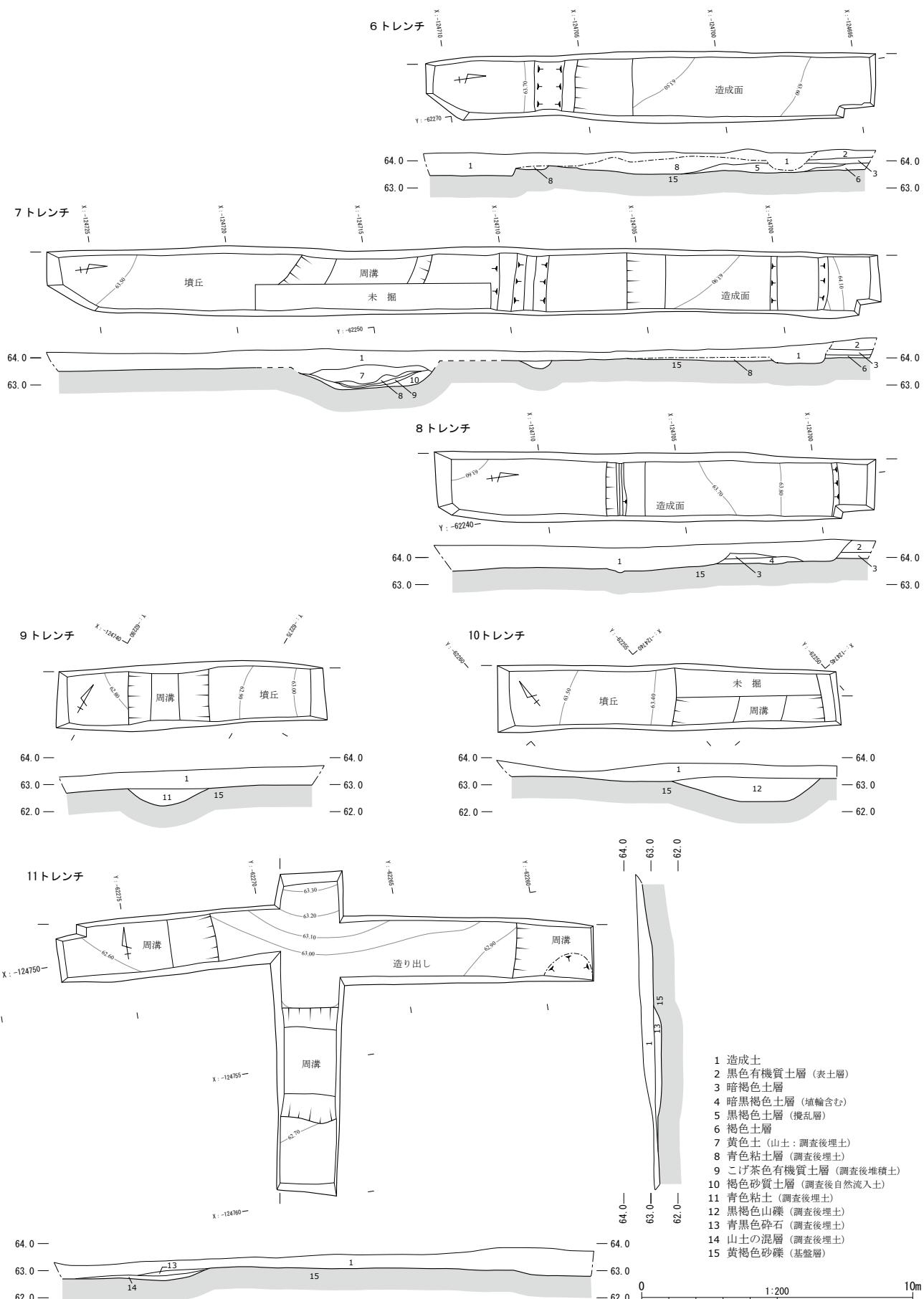


Fig.24 8次調査トレンチ実測図

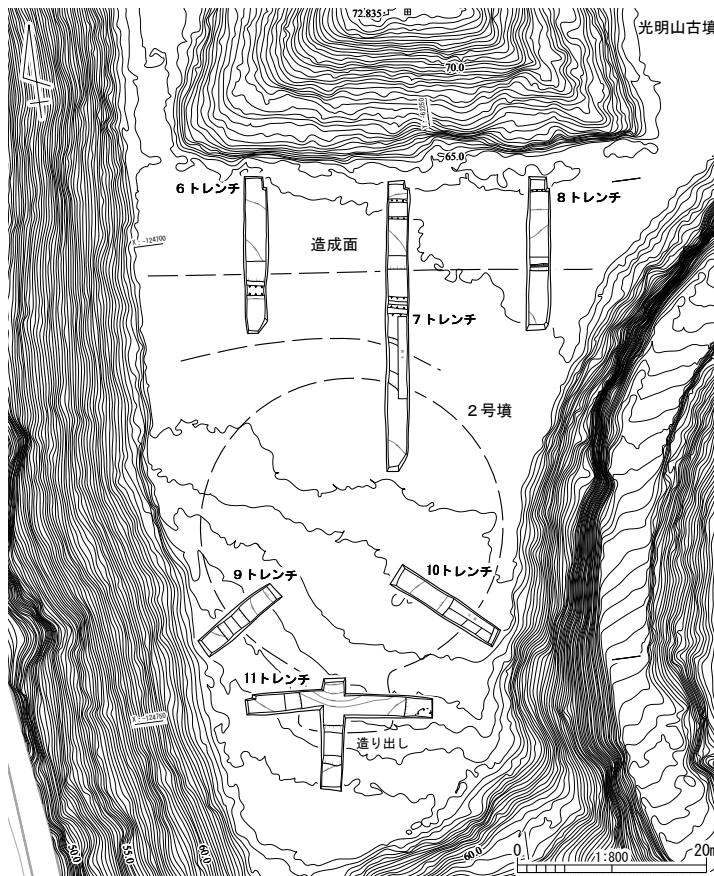


Fig.25 8次調査検出構造配置図

は、古墳築造当初の流入土が下層にあり、中央には黒褐色をした腐植土が存在した。黒褐色土からは灰釉陶器も若干認められており、平安時代までは周溝だけでなく、墳丘自体もしっかりと残っていたと推測される。

墳丘盛土 8次調査では、墳丘盛土は全く確認されず、地山層に掘り込まれた周溝が残っていただけである。3次調査では、地山層の直上に、厚さ約20cmの古墳築造以前に存在した旧表土層（黒色土）が認められた。しかし、造り出し部分では、当時すでに削平が進んでおり、黒色土を確認できなかった。墳丘盛土は、厚さ80cmほどが存在したが、各所に攪乱が認められた。墳丘西側にある大きな窪みは、壁土用粘土を採掘した跡である。今回の予備調査でも、白色～黄白色をしたきれいな粘土層が墳丘部の地山層に認められた。盛土には、褐色土、黄褐色土、暗褐色土があり、周溝掘削土を盛っていると考えられるが、残存した墳丘はわずかで、その構築方法を推定することはできない。

埋葬施設 3次調査で墳丘頂部を旧表土面まで掘下げたが、埋葬施設は痕跡すら確認されなかつた。壁土用粘土の採掘や、やまゆり荘が建設される前にあった児童遊園地の整備などにより、古くに滅失したものと考えられる。そのため、副葬品は、その残欠すら確認されなかつた。

築造年代 光明山2号墳の築造時期にかかるる資料は、今回の調査では得られなかつた。1971年の調査では、6世紀前半と推定される須恵器の高杯と壺の破片が出土していると伝えられている。これによると、現状では6世紀前半の築造と言わざるを得ないが、出土須恵器の所在が不明であつて、再確認できない。なお、2号墳の墳丘下には旧表土層が存在している。光明山古墳の築造に際して、影響を受けていないので、光明山古墳と同時に設計された可能性も否定できない。光明山2号墳の造り出しが接続する方向も、光明山古墳の前方部と同じ南側である。この点も、両者が一連の構造物であったことを示唆するものといえるだろう。

周溝 2号墳の周溝は、光明山古墳の墳裾から南へ15～16m、造成面南端から5～7m離れて掘られている。光明山古墳に面する2号墳の北側周溝の幅は約4mであり、内側は墳丘に沿うが、外側は幅を広げて丘陵斜面に及んでいる。墳丘南東部と南西部側では幅5m、深さ0.4mの周溝が確認されており、この状況は8次調査でも追認した。しかし、墳丘の東西両側においては、丘陵の斜面部が迫っていることから、周溝が存在したとしても、外側の立ち上がりはすでに消失している。造り出し側については前述したとおり、周溝の外側の立ち上がりは、3次調査時においても、不明瞭であった。

北側の周溝の断面は、外側が急斜面をなしており、墳丘側がなだらかであった。概報では光明山古墳の存在を意識したためとしている。周溝の埋土

4 出土遺物

(1) 光明山古墳群出土遺物の概観

2018年の光明山古墳における発掘調査（7、10次調査）で出土した遺物には、埴輪をはじめ、墳丘内の旧表土中から出土した弥生土器や、墳丘上面から出土した中世の土鍋、陶器などがある。本書刊行までに出土遺物の整理作業が完結できていないことから、以下では埴輪に限定し、その概要を報告する。なお、1971年に実施した光明山2号墳の発掘調査（2、3次調査）では縄文土器や須恵器、和鏡、陶器などが出土している。このうち、2次調査で出土した埴輪については所在が確認できているものの、それ以外の遺物については所在不明である。

光明山古墳から出土した埴輪には、円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。形象埴輪については、従前の調査で出土、採集された資料を含め、確実なものは知られていない。2018年の発掘調査において樹立状態が確認できた埴輪はないが、墳頂平坦面や中段平坦面からまとまった量の埴輪片が出土している。とくに2トレンチの墳丘外側から出土した1や18は接合する破片が比較的揃っており、全体形状がうかがえる。これらの埴輪は出土状態から判断して、中段平坦面から転落したものと考えられる。また、3トレンチの中段平坦面から出土した2や3は、本来の樹立位置と近い場所で埋没したものと考えられる。

以下、円筒埴輪と朝顔形埴輪に分けて概要を示す。なお、破片の状態では口縁部や肩部を除き両者を区別することが出来ないことから、胴部や底部の破片については円筒埴輪の項目内で報告する。

(2) 円筒埴輪

全体形状 円筒埴輪のうち、2トレンチから出土した資料(1)が口縁部から基底部まで接合した。この個体は、2条の突帯をめぐらせた3段（以下、2条3段と略す）の構成である。下から数えて第2段の2方向に円形の透孔がみられ、緩やかに外反する口縁部に繋がる。この個体は、焼け歪みが顕著であるが、変形を矯正して図化している。復元的に求めた高さは52.3cm、口縁部の直径は27.5cm、基底部の直径は19.5cmである。突帯を除く各段の高さは、第1段（基底部）が19.7cm、第2段が13.0cm、第3段（最上段）が10.5cmである。基底部が他段と比べ高く、そのいっぽうで第3段が他段と比べ低いことなど、通常の円筒埴輪の全体形状と比べると異なる特徴を有する。また、後述するように外面にハケメを施した幅が広い突帯も独特である。

この他、確実に全体形状がうかがえる個体とはいえないものの、3トレンチ中段平坦面から出土した2や3をはじめ4、6についても、2条3段構成の可能性が高いとみられる。これら遺存部分が大きい破片を比較すると、最上段（推定第3段）の高さが7.5cm～11.0cmと違いが顕著である。

焼成 墓輪には黒斑が認められないことから、窯窓焼成されたものとみられる。須恵器のように硬質に焼きあがるもの

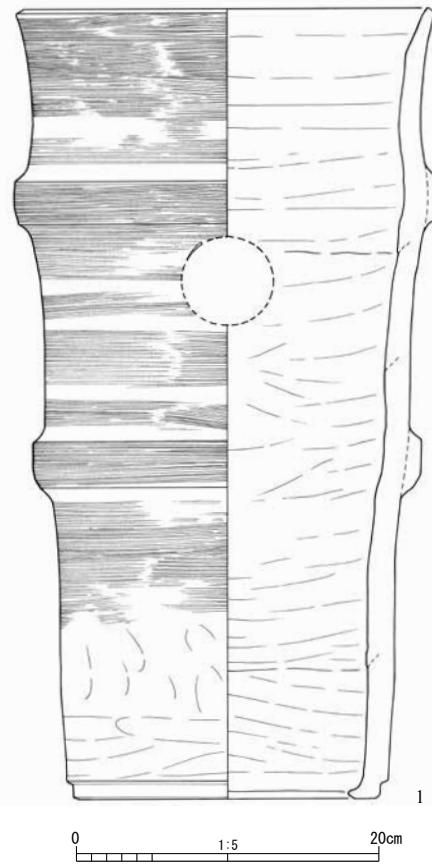


Fig.26 光明山古墳出土円筒埴輪（1）

があるが、その割合は決して高くなく、比較的軟質に焼きあがるものが主体を占める。軟質に焼きあがる埴輪片には風化が顕著なものもみられるが、出土した埴輪の調整技法は概ね良好に観察できる。また、光明山古墳の埴輪は、全体的に焼け歪みが顕著である。基底部は比較的円形を保っているとみられるが、第2段から第3段に至ると楕円形を呈するものが多い。このため、小破片においては、実測図において、正確な直径や傾きが示せていない場合があると考えられる。

色 調 光明山古墳から出土した埴輪の色調は、焼成状態によって異なる。硬質に焼きあがるものについては、暗紫色ないしは暗褐色を呈する。いっぽう、軟質に焼きあがるものについては赤褐色もしくは黄褐色を呈する。

胎 土 墓輪の胎土は、いずれも緊密であり、混和材として砂粒を多く含んでいる。砂粒は、長軸1～3mmほどであり、白色なしは灰色を呈するものが多数を占める。埴輪の破片中に際立って異なる特徴をもつ胎土は確認できない。

調整技法 円筒埴輪の外面1次調整はナデ（イタナデを含む）によってなされている。明瞭な調整痕を残していないこともある。1次調整の特長は突帯が剥離した破片（11、12）や基底部が残る個体（1、14～17）で明瞭である。いっぽう、外面2次調整は基底部を除き、外面全体にヨコハケが施される。2次調整のヨコハケは幅2.0～2.5cm程度の原体を用いたものである。ヨコハケの静止痕跡は全く見られず、開始点や終点が不明瞭である。ヨコハケの条線は横方向に一定せず、波打つ箇所が多い。ヨコハケの条線は2cm間隔で4～5本程度の非常に粗いものと、7～8本程度のものの2者がある。

後述するように、外面調整のヨコハケは、突帯の外面にも施されている。突帶上に施されるヨコハケの特徴は、胴部にみられるものと同様である。胴部上と突帶上のヨコハケは一連の工程で施されたものと考えられる。

内面調整は口縁直下を除き、ナデもしくはイタナデである。イタナデの場合、ごくわずかに条線がみられるタテハケ状の痕跡を残すもの（8）がある。口縁の内面端部にはヨコハケが施されるものがあるが（4～7）、口縁形状が外反するものに伴う傾向がある。

口縁形状 円筒埴輪の口縁部は、直立するもの（2、3）と、外反するもの（1、4～7）の2者が認められる。直立するものは端部を丸くおさめている。いっぽう、口縁が外反するものは、端部に明瞭な面をもつ。前者には幅が狭い突帯が伴い、後者には幅が広い突帯が伴うので、口縁形状と突帶形状の違いには製作工人の差が反映されている可能性がある。

突 帯 突帯は、幅約3～4cm、高さ0.8～1.0cm程度の幅が広いもの（以下、幅広突帯という）と、幅2cm前後、高さ1cm程度の通有の形状（以下、幅狭突帯という）の2者がある。両者ともに、突帶外面にハケメをめぐらしている点では共通する。幅広突帯については、ヨコハケを上下2段に施していることが多い。幅広突帯と幅狭突帯の比率については、圧倒的に前者が多い。

突帶が剥離している資料からは、突帶を設定するための目安として凹線が用いられていることがうかがえる。幅広突帯にみられる凹線（Fig.27-5）は比較的浅い。いっぽう、幅狭突帯にみられる凹線（Fig.27-6）は、比較的鋭い工具を用いたものである。突帶形状の違いと突帶設定技法の差が相互に関連する可能性があるだろう。

透 孔 透孔は確認できるものすべてが円形を呈する。遺存部分が小さく明確でないが、正円を呈さず、楕円形をなすもの（6）も一定量含まれるとみられる。

底 部 墓輪の底部については、段をもつ淡輪技法がみられる。底部の段は比較的明瞭なものが多い。また、ごくわずかに段がみられない底部があるが、遺存状態が悪く、その詳細は不明確である。基底部外面はヨコハケを施さない傾向がある。

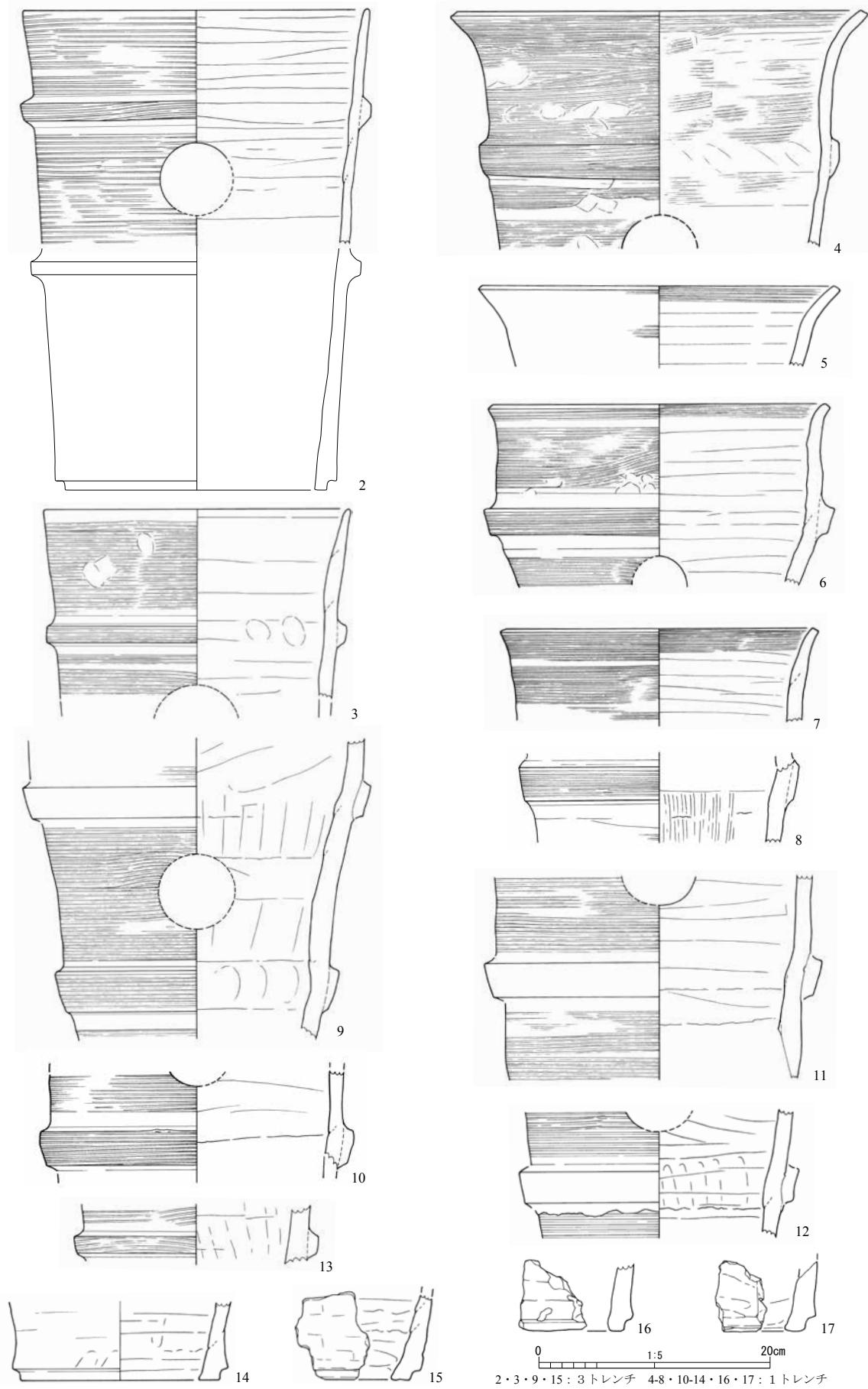
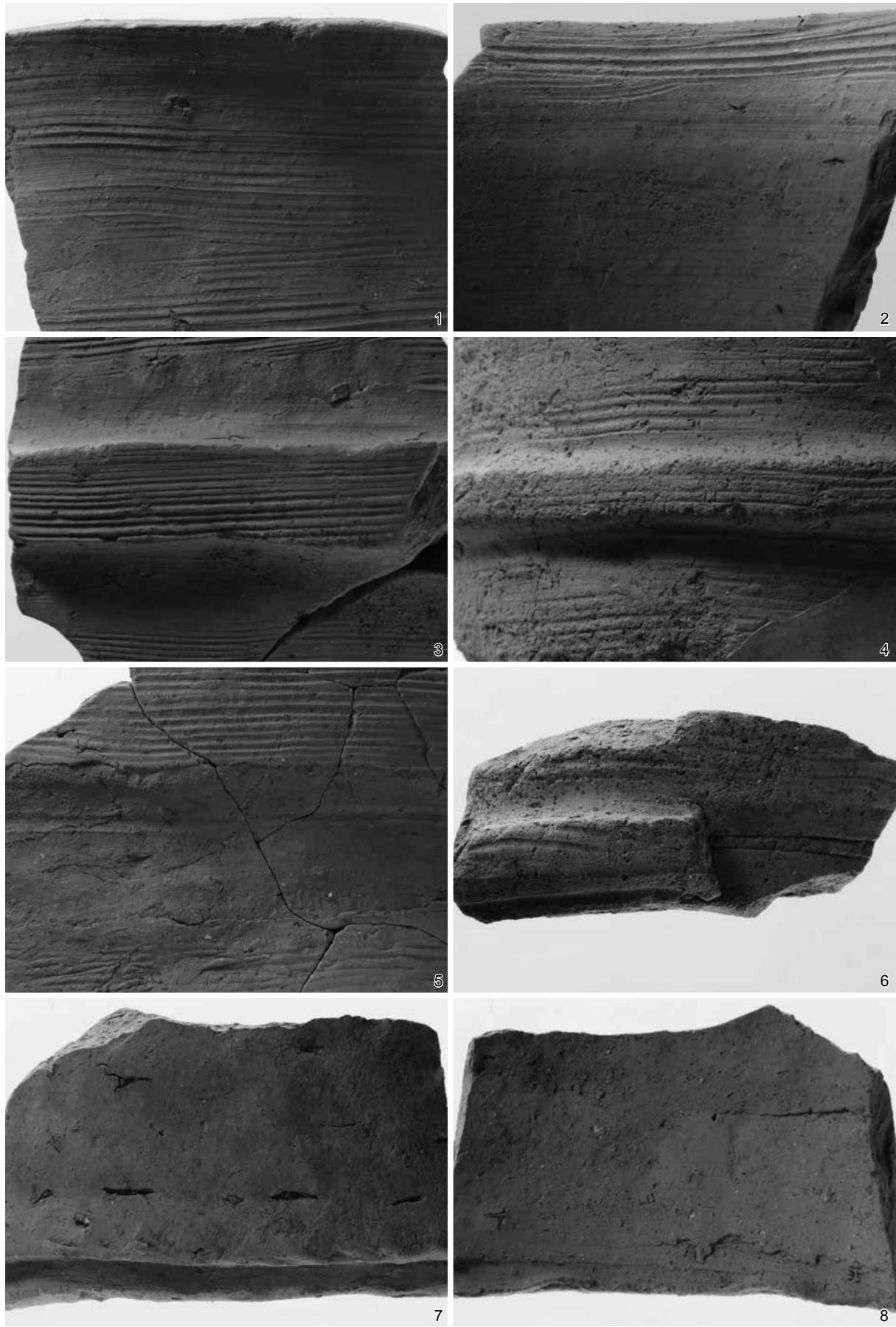


Fig.27 光明山古墳出土円筒埴輪（2）



1・2：口縁部、3・4：突帶、4・5：突帶設定技法、6・7：基底部 1・2：Fig.27-4、3：Fig.27-6、4：Fig.27-3、5：Fig.27-11、6：Fig.27-13、7・8：後円部墳裾出土

Fig.28 円筒埴輪の詳細

(3) 朝顔形埴輪

全体形状 2トレンチから出土した個体(18)は、一部欠損箇所があるものの、全体形状がうかがえる。基底部は欠損するが、円筒部は2条3段構成であると考えられる。第2段の突帯間隔は10.0cmであり、推定できる全体高は59.7cmである。胴部の直径は20.0cm、口縁部の直径は41.0cmに復元でき、細長い胴部に深い口縁部がつながる特異な形状を呈する。頸部には突帯をもたない。この特徴は19や23にも認められるので、光明山古墳の朝顔形埴輪にみられる一般的な傾向といえる。朝顔形埴輪の口縁部(19～22)は、いずれも器壁が厚く、重量感がある。多くの破片は全体形状が不明確であるが、胴部と比べて口縁が厚手に作られる傾向があるものとみられる。

朝顔形埴輪の胴部については、直径25～27cmといった円筒埴輪と共通する一群(24～26)と、直径20cm前後の比較的小型の一群(18、27)が知られる。円筒埴輪の胴部径と共通する朝顔形埴輪には幅広突帯が伴い、小型の一群とした18や27に幅狭突帯がみられる。胴部の大小と、突帯形状が関連する可能性があるだろう。

口縁形状 先述のとおり、朝顔形埴輪の口縁部は胴部と比べると厚くつくられる傾向があり、全体に占める高さの比率も大きい。端部は明瞭な端面がつくられており、端面にもヨコハケを施すものがある(20)。口縁内面にはヨコハケが施され、その範囲は比較的広い。

その他の特徴 朝顔形埴輪にみられる焼成や色調、胎土、調整技法、突帯、底部などの特徴は円筒埴輪と共通する。古墳によっては、樹立された円筒埴輪と朝顔形埴輪に特徴の違いがみられることがあるが、光明山古墳の事例については、両者の共通性は比較的高いといえる。

(4) 小 結

光明山古墳の円筒埴輪と朝顔形埴輪は、ともに淡輪技法をもち、本体(胴部)は2条3段構成を基本とする。幅が狭い原体を用いたヨコハケを胴部のみならず突帶上にも施す。ヨコハケには明瞭な静止痕は認められない。全体形状や調整技法、突帯形状など、一般的な円筒埴輪や朝顔形埴輪と比べると特異な点が目立つ。また、形象埴輪が一点も確認できていないことも、光明山古墳出土埴輪の個性の一つに加えることができるだろう。

本例の編年的位置づけについては後述するが、当地において窯焼成技術が定着する時期の所産とみられ、古墳時代中期中頃から後半(5世紀中頃から後半)に相当すると捉えられる。

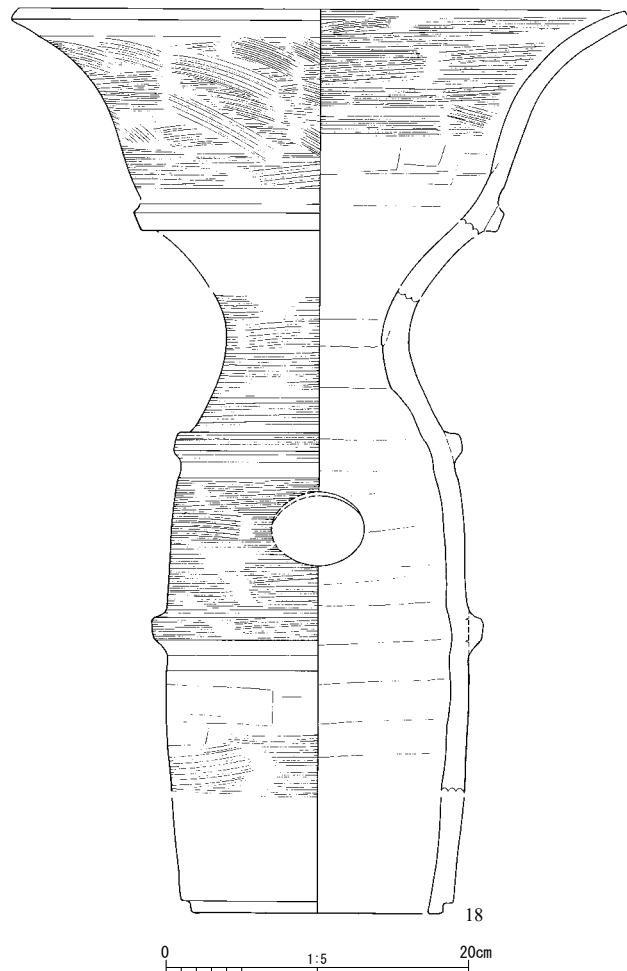


Fig.29 光明山古墳出土朝顔形埴輪(1)

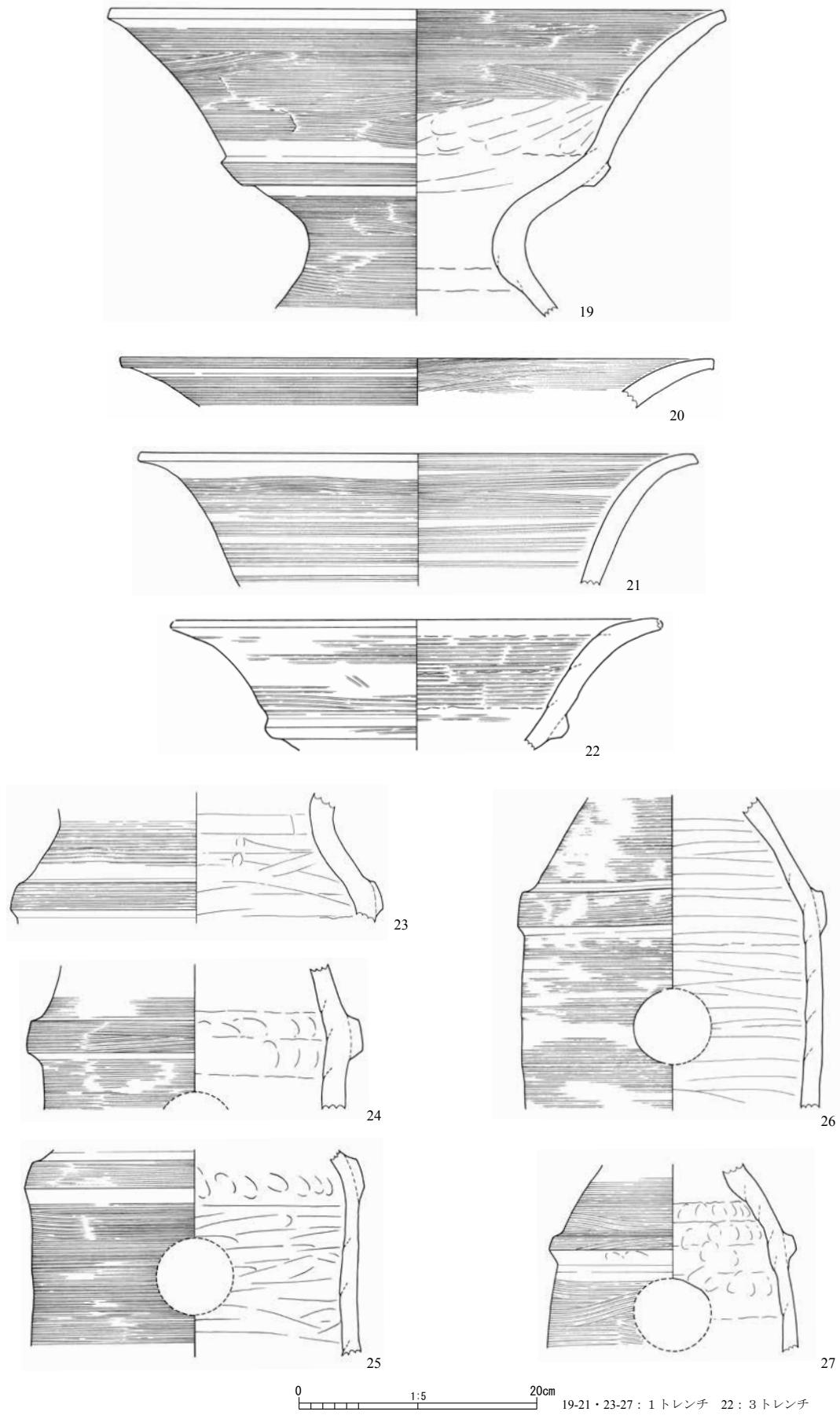


Fig.30 光明山古墳出土朝顔形埴輪（2）

第3章 後論

1 光明山古墳の構造と築造時期

(1) 光明山古墳の構造と規模

2018年に実施した発掘調査および測量調査によって、光明山古墳の墳丘規模や構造、出土埴輪の詳細が明らかになった。まずは、その詳細をまとめておきたい。

墳丘の詳細 発掘調査の結果、光明山古墳は墳長83mの前方後円墳であることが判明した。前方部を南に向けており、墳丘主軸は座標経線から6度10分12秒東に振れている⁽¹⁾。

後円部、前方部とともに2段築成であり、上段墳丘と下段墳丘の斜面には葺石がみられる。また、下段墳丘の葺石基底部の外側には、高さ25～50cmほどの地山削り出しの基壇が巡っているとみられる。

発掘調査で得られた各部の計測値は以下の通りである。後円部直径48m、後円部上段直径37m、後円部高8.5m、前方部高8.3m、後円部下段墳丘高1.7m、後円部上段墳丘高6.8m、前方部下段墳丘高2.8m、前方部上段墳丘高5.5m（高さはいずれも主軸上での計測値）。墳丘斜面の傾斜角についても後円部、前方部ともに近似しており、下段墳丘が26～28度、上段墳丘が30～32度である。上段墳丘の方が下段墳丘と比べて急傾斜である。中段平坦面の幅は約2.2mであり、その高さは後円部、前方部ともにほぼ水平であり、標高66.9～67.2mを測る。

古墳が構築される造成面の標高は、後円部主軸上端部で65.25m、前方部主軸上端部で64.0mである。両者では、1.25mほどの比高差がある。中段平坦面はほぼ水平であることから、後円部下段墳丘に比べて、前方部下段墳丘が高い。後円部墳頂部の標高は74.0m、前方部墳頂部の標高は72.8mであり、標高値で比べると後円部の

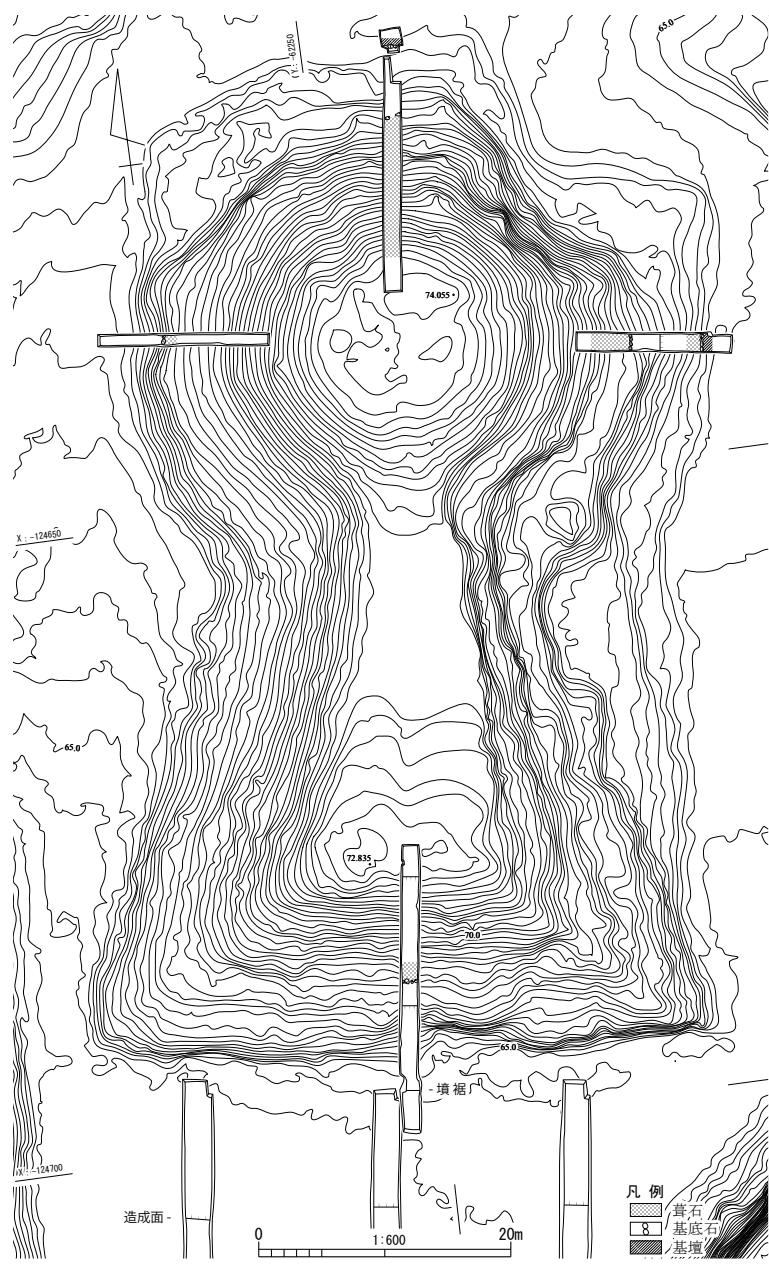


Fig.31 光明山古墳遺構配置図

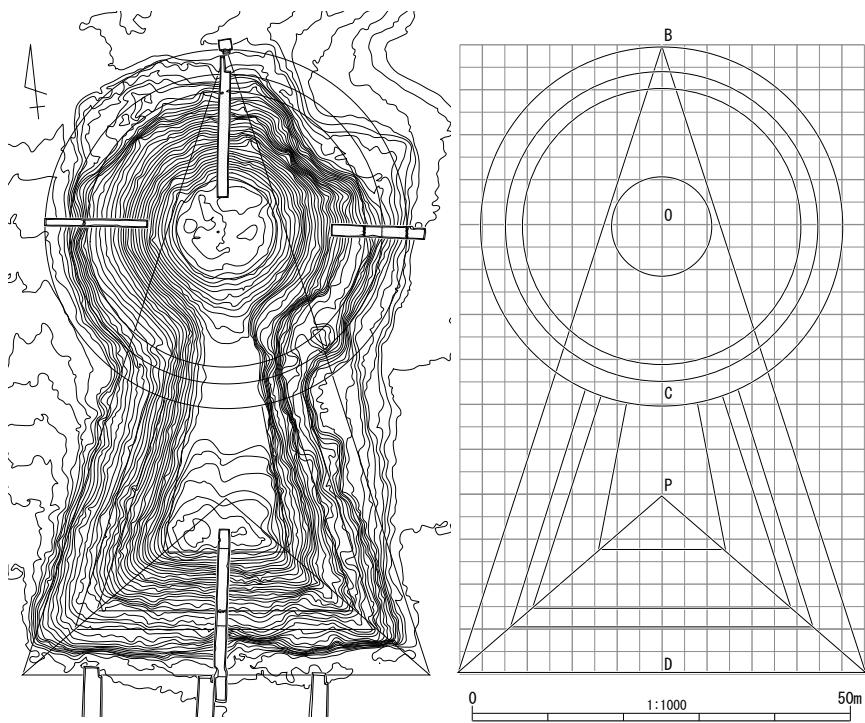


Fig.32 光明山古墳の設計原理

方が 1.2 m 高い。いっぽう、基底部からの高さを比較すると、後円部と前方部の見かけ上の高さはほぼ同じといえる。

墳丘の設計 調査成果をもとに光明山古墳の墳丘の設計を復元すると、概ね Fig. 32 のとおりに整理できる。前方部の幅やくびれ部の位置など、今後の調査によって修正は必要であるが、後円部の直径を基準に前方部の形状が決められていることがうかがえる⁽²⁾。

光明山古墳は、前方部

が比較的発達しており、前方部の斜辺を結ぶ頂点は後円部の外郭線と一致する。中期後半には前方部斜辺の頂点が後円部の内側に求められる墳形もみられることから、光明山古墳の墳形は中期中頃から後半にかけての前方後円墳にみられる典型的な形状を呈しているといえるだろう。

葺石の特徴 葦石は長軸 20cm ほどの角礫を用いている。各段の基底石には一回り大きい長軸 30 ~ 40cm ほどの石材を使用する。また、後円部主軸トレンチ（1トレンチ）では縦方向に延びる区画石列を確認した。区画石列は主軸からは若干斜方向に振れているが、基底部から墳頂部まで 6 m 以上を一直線に結んでいる。1トレンチにおける葺石の遺存状況は極めて良好で、墳頂平坦面を区画した天端石の可能性がある石列も確認できた。

埴輪の樹立 墳輪は墳丘斜面から多く出土したが、墳頂平坦面と中段平坦面の双方からまとまって出土する傾向がみられた。樹立位置をとどめた埴輪は確認できなかったが、本来は墳頂平坦面と中段平坦面に埴輪列がめぐっていたものと考えられる。下段墳丘外側の墳裾には埴輪を樹立した痕跡は見いだせなかった。2トレンチでは、墳裾から遺存部分が大きい埴輪が出土したが、いずれも中段平坦面から転落したような出土状態を示していた。

埋葬施設 今回の調査では、後円部、前方部とも墳頂平坦面の発掘は行っていない。また、過去の伝承を含め埋葬施設にかかる情報は知られていない。現状では墳頂部に大きな地形の改変がみられないで、埋葬施設が良好に遺存している可能性が高いといえる。

墳丘の構築 光明山古墳の墳丘は、丘尾切断型の墳丘構築方法を採用している。南側に舌状に延びる丘陵を横断的に切断して切り開き、墳裾をめぐる外縁を幅 10 m 程度、平坦に造成している。後円部北側では切断された尾根先端が弧状に形成されており、その最下部は初期に流入したとみられる土砂で埋もれている。前方部南側には墳裾から幅 10 m ほどにわたって、10 ~ 20cm ほどの浅い造成面が形成されている。光明山古墳が立地する尾根は東西に痩せていることから、光明山古墳には周溝は伴わないと判断できるが、北側と南側の状況を勘案すると、墳裾の外縁に幅 10 m ほどの平坦面が墳丘外側に巡っていたとみられよう。

光明山古墳の墳丘は下部が地山削り出し、上部が盛り土で形成されている。墳丘内に断ち割りを入れた箇所においては、中段平坦面付近に地山上端もしくは旧表土が確認できた。旧表土が良好に遺存していることから判断すると、墳丘の構築にあたっては、地山の成形は墳丘の形状に近い状態まで行われ、盛り土を最小限にとどめる配慮がなされているとみられる。中段平坦面の造成については、ある程度、地山を削り出した上に整地土を乗せていたとみられる（1、3、5トレンチ）。今回の調査では原位置をとどめる埴輪は確認できなかったが、中段平坦面の整地とともに、埴輪を樹立していた可能性が高いであろう。

（2）出土埴輪の特徴と古墳の築造時期

埴輪の概要 光明山古墳の円筒埴輪と朝顔形埴輪は、ともに基底部に製作時の痕跡である段を残す淡輪技法をもち、本体（胴部）は2条3段構成を基本とする。埴輪には黒斑は認められず、窯窓によって焼成されたものとみられる。幅が狭い原体を用いたヨコハケを胴部のみならず突带上にも施す。突帶は通有の形状のものほかに、低平で幅が広い形状のものがあり、後者が主体を占める。ヨコハケには明瞭な静止痕は認められない。全体形状や調整技法、突帶形状など、一般的な円筒埴輪や朝顔形埴輪と比べると特異な点が目立つ。また、形象埴輪が一点も確認できていないことも、光明山古墳出土埴輪の個性の一つに加えることができるだろう。

編年の位置 遠江における淡輪系埴輪については、鈴木敏則による一連の論考（鈴木敏 1990、1994、2003）に加え、筆者もその変遷について一定の見通しを示している（鈴木一 2012、2018）。当地における淡輪系円筒埴輪は、形態的特徴や調整技法の違いから淡輪系I類とII類に分類できる。I類は1次調整がナデで仕上げられるものであり、II類は1次調整にハケもしくはハケと関連が高い工具を用いるものである。淡輪系I類は、外面ヨコハケと通有の突帶をもつIa類、外面ヨコハケで突帶上にもヨコハケを入れるIb類、外面をナデ調整するIc類に分けることができる。いっぽう、淡輪系II類は最下段にヨコハケを有するIIa類、最下段にヨコハケを施さないIIb類、外面調整全体のハケの省略傾向が強いIIc類に分けることができる。

光明山古墳の埴輪はIb類に位置づけられ、関連性が高い資料として磐田市京見塚古墳例があげられる。型式学的に淡輪系I類の推移を辿ると、Ia類もしくはIc類の浜松市千人塚古墳例が最も古く、光明山古墳と京見塚古墳の事例が後出的である。Ib類の中では、光明山古墳例の突帶の突出度が高いこと、タタキ技法をもつ資料を含むことから、京見塚古墳例よりは遡る傾向が見いだせる。また、Ib類にみられる粗いヨコハケや幅広突帶の上にヨコハケを施す技法は、磐田市堂山古墳や堂山2号墳の資料（石見型埴輪など）の中にもあり、近接した時期を想定することも許されよう。堂山古墳および堂山2号墳の築造時期はTK73型式期、千人塚古墳の築造時期はTK73～TK216型式期、京見塚古墳の築造時期はTK208型式期とみられる。これら関連する資料の編年観を参考にすると、光明山古墳の埴輪はTK216～TK208型式期に位置づけることができるだろう。

光明山古墳出土埴輪にみられる突帶上までハケメを施す技法は、全体的に細身を呈する埴輪の形状とともに、当地における特有の様相といえる。光明山古墳では、発掘調査によって多くの埴輪が出土したが、現在までのところ形象埴輪が全く確認できていないことも留意したい。形象埴輪の樹立位置に調査が及んでいない可能性は否定できないが、墳丘には主に円筒埴輪と朝顔形埴輪の2者しか並べていないとみられる。淡輪技法は輪台技法とも呼ばれ（辻川 2007）、朝鮮半島を起源とする円筒形土製品を作り出す渡来系技術の系譜に連なる。埴輪の製作技術には、倭王權の直接的な関与を見出すことは難しく、新來の技術を積極的に導入した被葬者の独自性を見出すこともできるだろう。

1 古墳の構造と築造時期

西暦	須 恵 器	円 筒 塗 輪	特記事項
425	(TK73) TK216	I a I b I c 千人塚 光明山 タタキ 千人塚	淡輪技法の導入
450			
475	TK23	I b 京見塚 京見塚 京見塚	2条3段構成の確立
500	H11 TK47	II a 明通り窯 郷ヶ平3号 一ノ宮 郷ヶ平3号 明通り窯 郷ヶ平3号	II類の成立 人物・動物埴輪の本格導入
525	H10 MT15 TK10	II a 神内平1号 二子塚 辺田平1号 二子塚 辺田平1号 二子塚 (峠場窯) 江古山4号 江古山3号 古村積神社 峠場窯 江古山4号 権現平山6号 峠場窯 古村積神社 II b 0 1:10 20cm 亀塚 II c 0 1:15 20cm 亀塚	II a類と II b類の並立 第1段ヨコハケの盛行 【3条4段】 【3条4段】 第1段ヨコハケの衰退 2次調整 ヨコハケの衰退

Fig.33 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷

光明山古墳の築造時期 前方部が発達する光明山古墳の墳丘形状は、古墳時代中期中頃から後半にかけて類似した事例が求められる。また、埴輪の編年的位置は須恵器型式のTK216～208型式期に並行する。これらの年代観は互いに親和性が高く、本墳の築造時期はほぼ特定できるものとみてよいだろう。

以上のことから、光明山古墳が構築された時期は古墳時代の中期中頃から後半、実年代では5世紀中頃から後半にあたるといえる。

(3) 光明山2号墳

墳 丘 光明山2号墳については、2、3、8次調査によって、その詳細を明らかにすることができた。光明山2号墳は、造り出し付円墳で、その直径は32m、造り出しを入れた全長は38mである。葺石や埴輪は伴わない。埋葬施設は消失している。墳形については、帆立貝形とする考え方もあるが、円丘部に対する突出部の大きさは相対的に小さく、造り出しどとするのが妥当と判断できる（沼澤2011）。古墳時代中期の当地域では、帆立貝形墳を含め、前方後円墳に準じる首長墓には埴輪が伴う傾向が高く認められる。光明山2号墳には葺石や埴輪が伴わないことも、円墳と捉える考え方と整合的である。

築造時期 光明山2号墳の築造時期については、明確な根拠資料に恵まれないものの、光明山古墳と同一の設計のもとに築造されていることに注目したい。遠江においては、光明山2号墳の規模（直径32m）を超える後期の円墳は知られていない。また、造り出し付き円墳という墳形も遠江では古墳時代中期に数多く認められるが、古墳時代後期に入るとその数は極めて限定される。

光明山2号墳の築造時期については、幅を持たせて理解することが妥当であるが、以上のことから判断して、光明山2号墳の築造時期は古墳時代中期後半から後期初頭、実年代では5世紀後半から6世紀初頭頃と考えて、大きな間違はないといえるだろう。

前方後円墳と円墳 光明山古墳と光明山2号墳のように、前方後円墳と比較的大型の円墳が近接して築造される事例は全国的にも数多く認められる。近隣地の大型前方後円墳に限っても、松林山古墳と高根山古墳（静岡県）、甲斐銚子塚古墳と丸山塚古墳（山梨県）などが典型例としてあげられる。それぞれの事例には前方後円墳と円墳の間に築造時期に違いがみられることもあるが、両者は密接な関係をもった一連の勢力の墳墓として認識しうるものといえる。両者が組み合う事例は古墳時代前期から中期のものが多い。光明山古墳と光明山2号墳も、大型の前方後円墳に従属的な造り出し付き円墳を従えるような古墳時代中期まで広範にみられる地域首長墓のあり方を示す事例に加えることができるだろう。

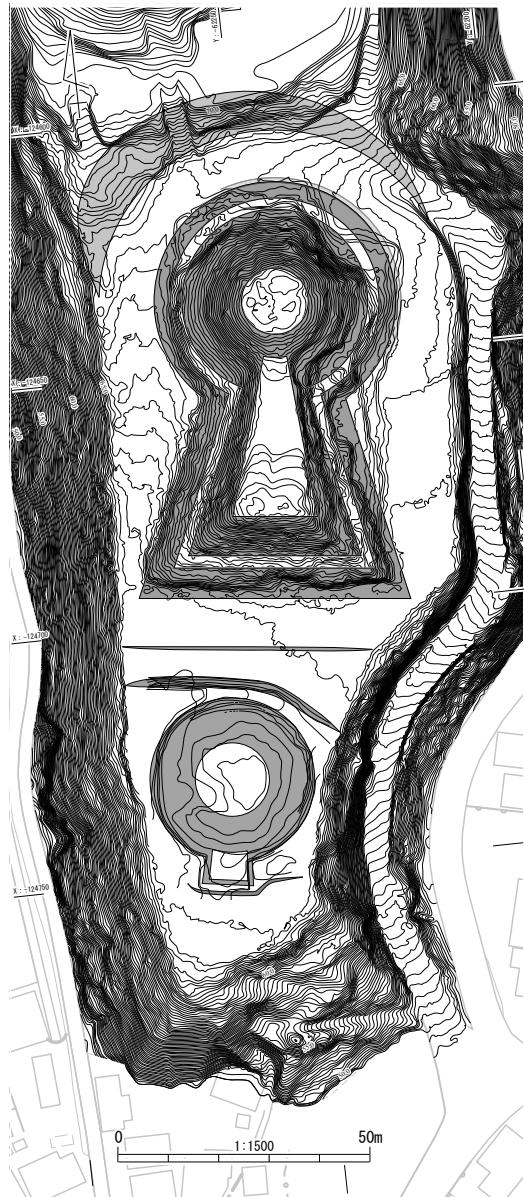


Fig.34 光明山古墳群復元図

2 光明山古墳築造の歴史的意義

光明山古墳にみられる諸特徴に加え、近隣地域の首長系譜や古墳の立地環境、さらに5世紀中頃の歴史動向を通じ、光明山古墳が築造された意義について触れておきたい。

光明山古墳は天竜の地に築かれた唯一の前方後円墳である。天竜地区にはこの古墳以外に有力な古墳を認めるることは難しく、首長墓と呼べるものは直径32mの光明山2号墳があげられる程度である。この古墳は築造時期に若干の差異があるとしても、光明山古墳と一連の勢力によって構築されたものと評価する方がよい。光明山2号墳を含めた同一勢力の墳墓として光明山古墳はその前後に首長系譜を認めることができず、独立性が高い点にも特徴がある。

古墳の築造時期である5世紀中頃から後半に注目すると、光明山古墳は遠江最大の前方後円墳としてその存在が際立っている。近隣地で同時期に築造された有力古墳としては千人塚古墳と京見塚古墳がある。ともに直径50mを前後する当地域における大円墳であり、古い段階の淡輪系埴輪を採用する点で光明山古墳とも関連性が高い。3基の古墳は、天竜川平野を望む東西と北の端部に三角形を描くように築かれている。また、千人塚古墳と京見塚古墳を結ぶ軸線は、浜名湖の北側を通る陸上交通路、二見道（近世の本坂通）にあたる。二見道沿いの浜名湖北岸には陣座ヶ谷古墳があり、さらに三遠の国境を超えた二見道が東海道と合流する地には、三河でも屈指の大型前方後円墳である船山1号墳（全長95m）がほぼ同時期に築かれている。5世紀中頃から後半にかけて内陸の交通路に沿って立地する古墳が多いことは、光明山古墳の特徴を知るうえでも看過できない。

西暦	時期区分	和田編年	須恵器	埴輪	土師器	都田川（浜名湖）流域			天竜川西岸			天竜川東岸			太田川流域			原野谷川流域			菊川流域他					
						湖西	井伊谷	細江・都田	浜松南部	内野	浜北	三方原	天竜	磐田原東	磐田原台地南部		大之浦北西側		大之浦北東側		中・上流		下流		中・上流	
300	古墳時代	中期	I式	廻間三式	馬場平	1																				
						2																				
						3	49	北岡大塚																		
						4																				
						1																				
						2																				
						3																				
						4																				
						1																				
						2																				
400	中期	II式	松河戸I式	松河戸II式	谷津	1																				
						2																				
						3																				
						4																				
						1																				
						2																				
						3																				
						4																				
						1																				
						2																				
500	代後期	III式	宇田I式	宇田II式	入野	1																				
						2																				
						3																				
						4																				
						1																				
						2																				
						3																				
						4																				
						1																				
						2																				
600	後期	IV式	宇田I式	宇田II式	神明社上	1																				
						2																				
						3																				
						4																				
						1																				
						2																				
						3																				
						4																				
						1																				
						2																				
終末期	飛鳥I	V式	利木	御経塚	中平2号	1																				
						2																				
終末期	飛鳥I	VI式	梅田61号	火穴	瓦屋西C5	1																				
						2																				
終末期	飛鳥I	VII式	梅田61号	火穴	新平山M4号	1																				
						2																				

Fig.35 遠江における古墳の変遷

光明山古墳が築かれた地からは天竜川は目視できないが、この古墳からは遠江南部と信州を結ぶ秋葉街道（信州街道）を眼下に望むことができる。光明山古墳が立地する天竜の地は、奥三河や東遠江にも繋がる交通の要衝である。内陸性の立地をみせる光明山古墳の被葬者には、陸上交通網の掌握に大きな役割を担った人物をあてるに相応しい。5世紀の中頃から内陸の地を結ぶように立地する首長墓が目立つようになることは、多くの地域で指摘されている（杉井2010など）。光明山古墳の一見、特にみえる立地環境も大きな歴史のうねりの中で捉える必要がある。

5世紀中頃の日本列島では、渡来系文化が積極的に移入され、馬を使った陸上交通も急速に発達する。天竜川を遡った長野県飯田市域で馬匹生産が盛んになり、前方後円墳も数多くつくられるようになるのも5世紀中頃を画期とする。飯田市域における古墳文化の隆盛は、東山道をめぐる開発がその原動力となっているが、同時期に天竜川が切り開く谷筋を伝う交通網の重要性が増したことでも、充分想定できるだろう。光明山古墳に採用された埴輪は、渡来系技術に連なる淡輪系埴輪であり、その被葬者は新来の技術の移入にも積極的であったことがうかがえる。5世紀中頃の日本列島の広域で繰り広げられた技術革新には、交通路の開拓も含まれていたと考えられ、この時期の各地の有力首長には内陸交通網の整備が大きく期待されていたとみられよう。

光明山古墳の墳丘形態には、近畿地方中枢からの情報移入が想定できる設計原理が見出せ、倭王権との密接な関係がうかがえる。いっぽうで、古墳の段築数は2段であり、形象埴輪を欠き、独特の形状をみせる埴輪群を採用していることも無視できない。ここまで検討を通じ、光明山古墳の被葬者は、倭王権と結びつきを持ちつつ、渡来系の技術を積極的に導入する中で独自性も發揮し、内陸交通の掌握と地域の開発に主導力を發揮した新興の首長と評価しうるだろう。

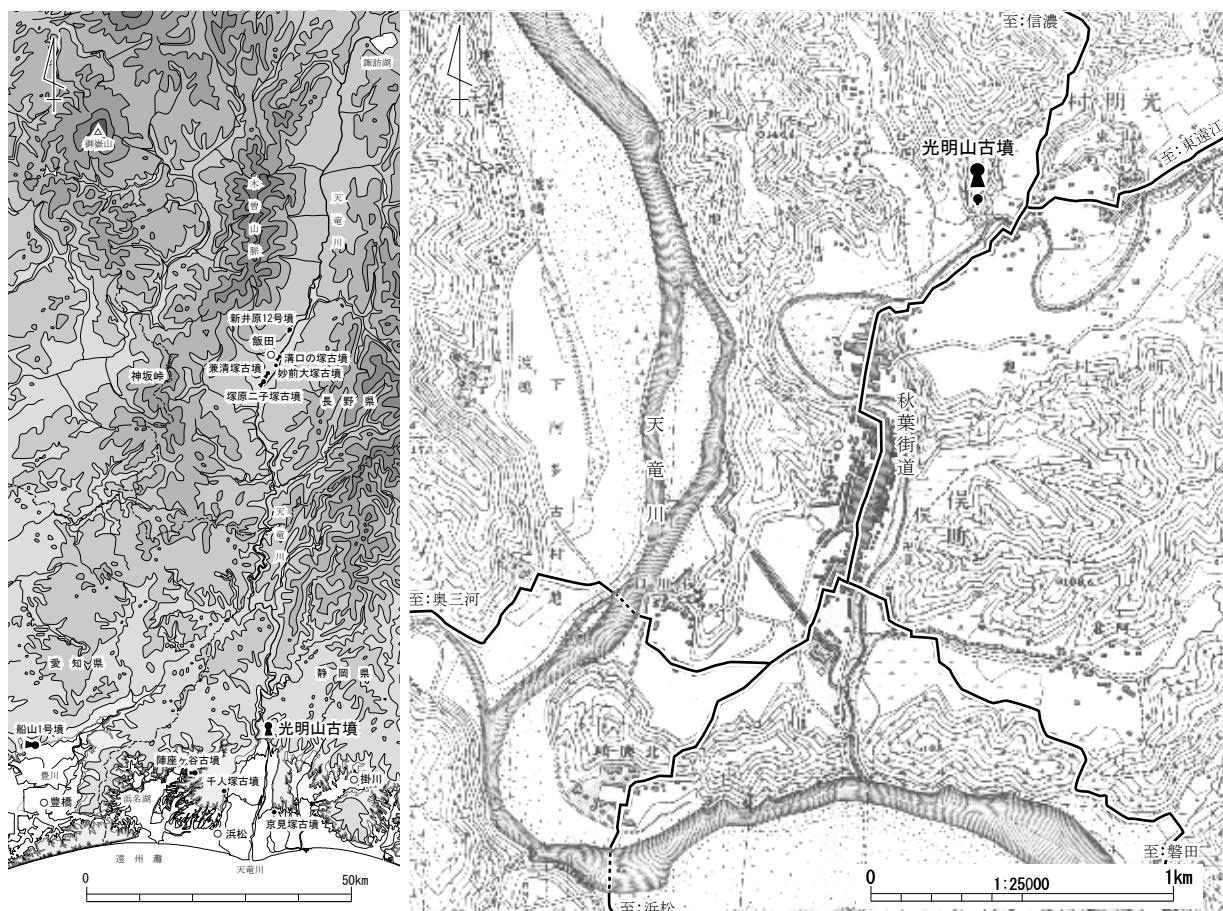


Fig.36 光明山古墳の立地環境

3 今後の展望

本書を通じて光明山古墳の内容を明らかにしてきた。改めて、光明山古墳の墳丘の遺存状態の良さと、埋没している遺構や遺物の情報量の多さが認識できたといえよう。残された課題も多いが、今後の出土遺物の整理作業や追加の発掘調査等を通じて、少しづつ問題を解消していくことしたい。また、発掘調査成果の検討を通じ、光明山古墳と光明山2号墳は相互に関連性が高いことも鮮明になった。両者が立地する丘陵は全体として良好な景観を保っており、5世紀中頃から後半に築造された内陸性の立地をみせる首長墓の典型的な姿を伝えている。

古墳時代中期の変革と政治動向がうかがえる記念物として光明山古墳がもつ意義は大きい。本墳の価値を正しく未来に伝えるため、古墳が立地する丘陵全体を含めた一体的な保存と今後の適切な活用の方策が望まれる。

註

- (1) 前方部の接続方向を検討した結果、光明山古墳の主軸の傾きは、2018年の発掘調査で用いた調査区の基準軸とは異なると判断できる。
- (2) 前方後円墳の墳丘設計については、後円部の直径を6分割もしくは8分割して分析されることが多い。光明山古墳の設計は、Fig. 32の右図に示す各地点の計測比率、BC:CP:PDが6:1.5:3であり、上田広範が示すC群に位置づけることができる（上田1963）。また、後円部を8等分する区画を基本単位に用いる宮川徳の類型では6区型に相当する。これらの設計原理はいずれも、古墳時代中期後半の古墳に類例が求められ、光明山古墳の築造時期をうかがうことができる。

参考文献

- 上田広範 1963 「前方後円墳における築造企画の展開」『近畿古文化論考』吉川弘文館
川江秀孝 1990 「県史跡 光明山古墳」『静岡県史』資料編2考古二 静岡県
河村安平・大場亀吉 1939 「磐田郡光明村上市場出土品について」『静岡県郷土研究』第13輯
関西大学考古学研究室 1998 「静岡県天竜市山東所在 県指定史跡・光明山古墳測量学術調査の成果」『静岡県の重要遺跡』静岡県教育委員会
光明村 1959 『光明村誌』
小林久彦 1994 「古墳の選地（Ⅲ）—西遠江と東三河との首長墓の比較から—」『転機』5号
柴垣勇夫 1995 「堂山古墳の企画性」『遠江堂山古墳』磐田市教育委員会
杉井健 2010 「肥後地域における首長系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会
鈴木一有 2012 「三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義」『郷ヶ平古墳群』（財）浜松市文化振興財団
鈴木一有 2018 「遠江における円筒埴輪の編年の到達点と課題」『東海の埴輪—出現と終焉、地域性を探る—』第31回考古学研究会東海例会
鈴木敏則 1990 「遠江の淡輪系埴輪」『転機』第3号 転機刊行会
鈴木敏則 1994 「淡輪系円筒埴輪」『古代文化』第46巻第2号 財団法人古代學協会
鈴木敏則 2003 「淡輪系円筒埴輪2003」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究会実行委員会
辻川哲郎 2007 「埴輪生産からみた須恵器工人」『考古学研究』第54号第3号
沼澤 豊 2011 「前方後円墳と帆立貝古墳」雄山閣
二俣高校社会部 1971 『光明山古墳（二号墳）発掘調査概報』
宮川 徳 1984 「築造企画からみた前方後円墳の群的構成の検討—巨大古墳の出現とその背景—」『権原考古学研究所論集』第6 吉川弘文館
向坂鋼二 1981 「古代の天竜市域」『天竜市史 上巻』天竜市役所
山田暁 2012 「光明山古墳採集の埴輪片」『浜松市博物館報』第24号 浜松市博物館

報 告 書 抄 錄

書名（ふりがな）	光明山古墳（こうみょうさんこふん）							
編著者名	鈴木一有（編集）、山中美歩、鈴木敏則							
編集機関	浜松市文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (050) 3730-1391							
発行機関	浜松市教育委員会							
発行年月日	2019年3月22日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
こうみょうさんこふんぐん 光明山古墳群	静岡県 浜松市天竜区山東	市町 村 22202	遺跡番号 7-01-56	34 度 52 分 27 秒	137 度 49 分 8 秒	2018 年 3 月 ～ 2018 年 11 月	360 m ²	内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
光明山古墳群	古墳	古墳時代	古墳（前方後円墳、造り出し付円墳）	埴輪	光明山古墳において葺石が良好な状態で残存、墳丘規模を確定。光明山2号墳において周溝の残存を確認した。			
要約	光明山古墳群は、全長83mの前方後円墳（光明山古墳）と、直径32mの造り出し付き円墳（光明山2号墳）からなる古墳群である。光明山古墳は2段築成であり、墳丘面には葺石が施されていることが判明した。また、埴輪片が豊富に出土しており、中段平坦面および墳頂部には埴輪が樹立されていたとみられる。光明山2号墳については、今回の確認調査により地中に周溝や造り出しが残存していることを確認した。							

北緯、東経は世界測地系の数値である

光明山古墳

2019年3月22日

発 行 浜松市教育委員会
編集 浜松市文化財課
(教育委員会の補助執行機関)
〒430-8652 浜松市中区元城町103-2
印 刷 松本印刷株式会社

図 版

PLATE



光明山古墳の墳丘現況

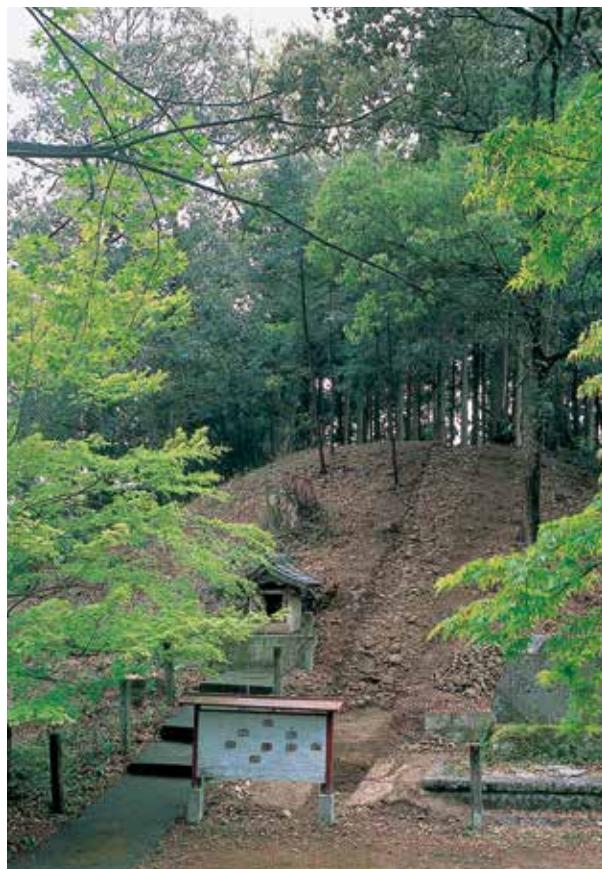


1 トレンチ全景

PL. 2



1 後円部全景



2 1 トレンチ遠景



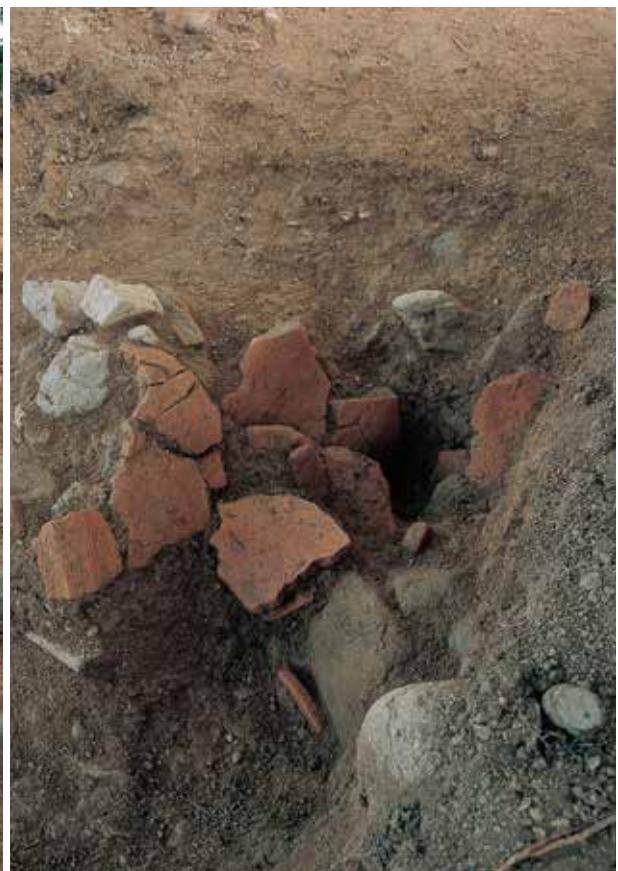
3 1 トレンチ葺石検出状況



1 1 トレンチ墳頂部検出状況



2 1 トレンチ墳頂部葺石検出状況



3 1 トレンチ墳頂部遺物出土状況



1 1 トレンチ葺石 (墳頂付近)



2 1 トレンチ葺石 (中段平坦面付近)



3 1 トレンチ中段平坦面検出状況



4 1 トレンチ中段平坦面サブトレンチ



2 トレンチ全景



1 2トレンチ遺物出土状況



2 2トレンチ遺物出土状況詳細



3 2トレンチ西側サブトレンチ



3 トレンチ全景



1 3 トレンチ墳丘上段検出状況



2 3 トレンチ墳丘上段サブトレンチ



3 3 トレンチ中段平坦面サブトレンチ



1 3 レンチ中段平坦面検出状況



2 3 レンチ遺物出土状況



3 3 レンチ遺物出土状況詳細



4 トレンチ全景



1 4 トレンチ葺石検出状況



2 4 トレンチ上段墳丘サブトレンチ



3 4 トレンチ下段墳丘サブトレンチ

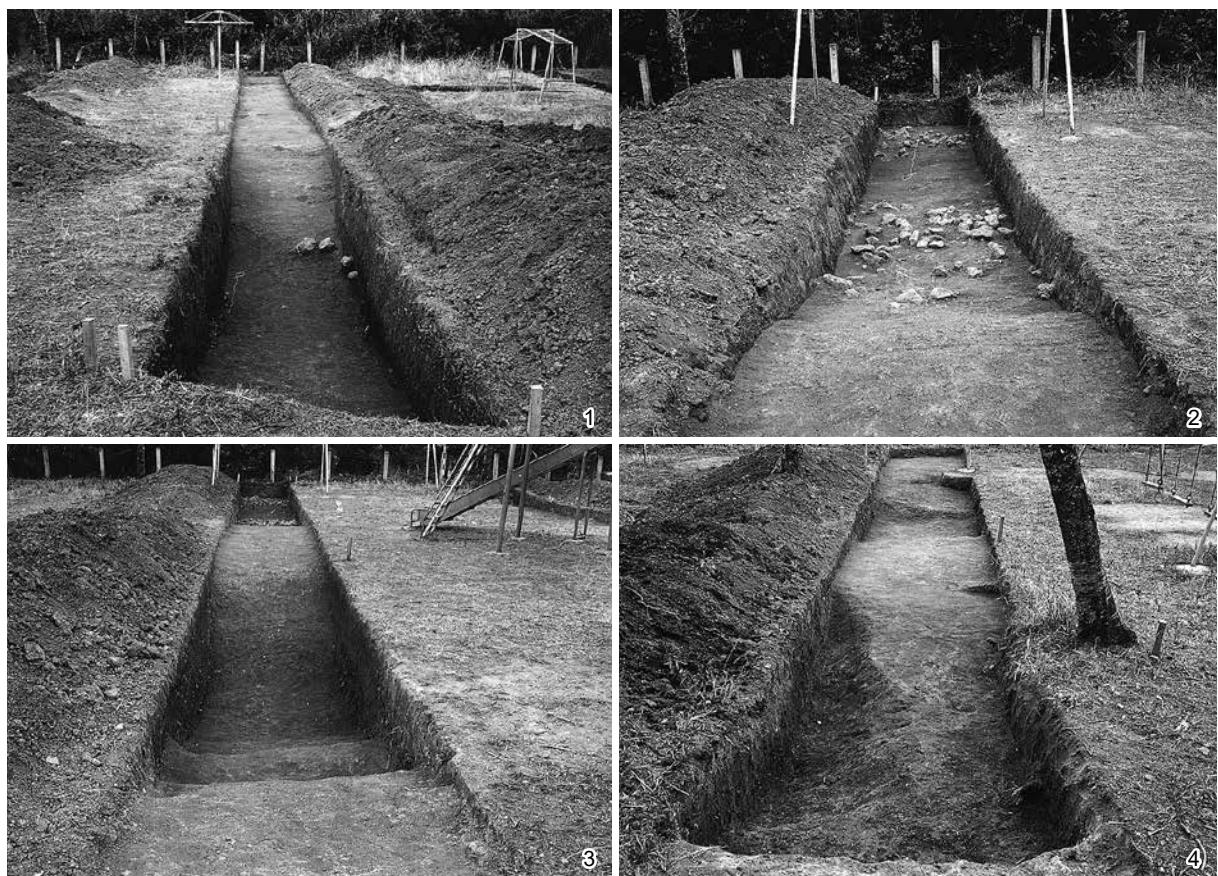
PL. 12



5 トレンチ全景



1 光明山2号墳2次調査箇所全景



2 光明山2号墳2次調査完掘状況 (1: Aトレンチ、2・3: Cトレンチ、4: Hトレンチ)



1 光明山 2 号墳 7 トレンチ



2 光明山 2 号墳 6 トレンチ



3 光明山 2 号墳 8 トレンチ



1 光明山 2号墳 7 トレンチ



2 光明山 2号墳 10 トレンチ



3 光明山 2号墳 9 トレンチ

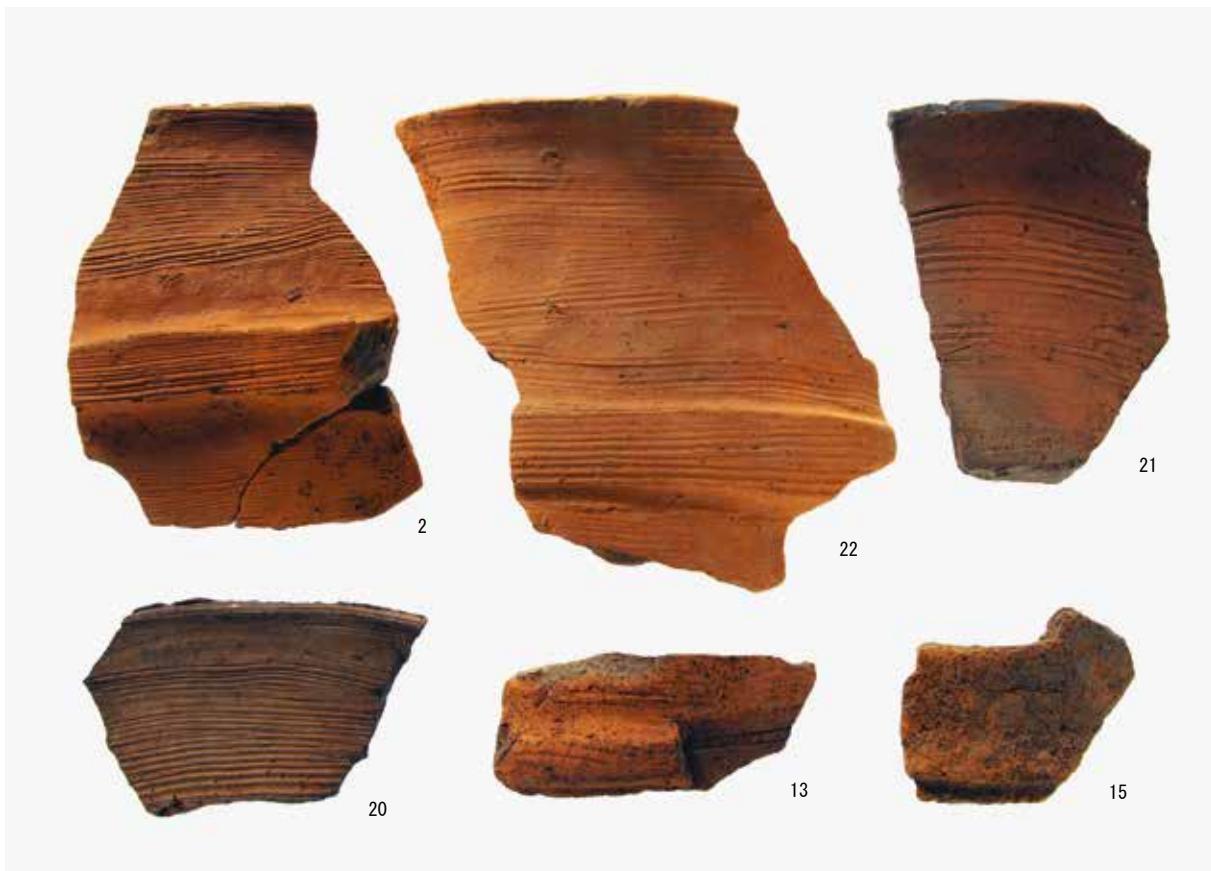


4 光明山 2号墳 11 トレンチ



1 円筒埴輪

2 朝顔形埴輪



3 出土埴輪の詳細

Kohmyohsan Tumulus

Excavation report

A Report of Archaeological Investigation on 5th
Century Tumulus in Western Shizuoka Prefecture,Japan



March 2019

Hamamatsu Municipal Board of Education